

---

# クローバー：コード

坂津狂鬼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クローバー：コード

### 【NZコード】

NZ876Y

### 【作者名】

坂津狂鬼

### 【あらすじ】

壊せ、命と同等の価値がある物を。  
それはメールから始まる壊し合いゲーム。

『ゲームの概要説明 参加者9名のうち一人の勝者を決めるゲームです。

参加者全員、コード、と呼ばれる不思議な力を持つています。  
参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合つてもらいます。

参加者が死亡した場合でも、物が破壊されなければ敗退にはなりません。

敗退条件は、ものの破壊です。

敗者は参加者の命、それと同等の物の破壊を禁じます。

勝者は失つてしまつた大切なものを復元する事が出来ます。例えそれが命であつても。

なお参加者それぞれのコードは《無影無踪》《非観理論》《否定定義》《完全干渉》《干渉不可》《禁思用語》《異見互換》《結論反転》《絶対規律》となつております。

ゲーム開始時刻は明日の0：00からでなければなりません。  
くれぐれも殺し合いと勘違にならないように。これはあくまで壊し合いです。

それではご検討を祈ります

「月は何で明るいと思う?」

「そんなもん、太陽光を反射しているからに決まってんだろうボケ」  
「人は空に大きく輝く月を見上げながら話し合ひ。

「何それ。夢が無さすぎるでしょ」

「ロマンチストになれるような人生は送れなかつたからな」  
「どんな人生を送つても、人は夢を見たり奇跡を信じたりするもの  
よ」

「夢を見たところでそれは夢でしか無くて、奇跡を信じたところで  
何かが変わる訳じゃない」

「……………それもそうね」

「随分と諦めが早いんだな」

「諦めるしかない人生しか送れなかつたからね」

「……………そうか」

沈黙の間も二人はずっと月を眺め続ける。ただ何の目的も無く。

「俺は」

二人のうちの一人が、沈黙に耐え切れなくなつたためか独りでに呴  
く。

「俺はここから抜け出す」

「無理だよ。無謀だよ。無力な貴方には絶対に出来ない」

「……………そんなすぐには否定することも無いだろ」

「ここから抜け出すなんて無茶を言うからいけないんだよ」

「無茶じゃない」

「無茶だよ。絶対に無理。不可能。諦めるべきだよ」

「無茶じゃない。絶対に無理じゃない。不可能じゃない。諦めるべ  
きじゃない」

「急にどうしたの? ホームシック?」

「別に。家族なら昔、目の前で殺されたからホームシックではない

だろ」「

「ならどうしてここを抜け出すなんて言うの？　当りもあるの？」

「当てもない。目的も無い。ただ、ここで終わるつもりも無い」

「バカなの？　バカでしょ？　バカなんでしょ？　ここから抜け出すなんて絶対に無理なのに何でやるうとの？」

「だから無理じゃない。お前が協力してくれれば可能だ」

「誰が協力したところでここから抜け出すなんて」

「絶対に出来る。俺は全てを欺いて見せる」

「なんだ、夢の一つ見れるじゃない。そんな哀れで儂い夢の一つ」

「夢じやない。現実に変えてやるよ」

「……何を言つてゐるの？」

「簡単な事だ」

間を置き、答える。

「欺いてみせる、世界も神様も。だからお前は俺を信じて協力してくれればいい」

「…………」

朝田が眩しく、堪らず目を覚ます。

どうやら俺はいつの間にか寝ていたみたいだ。しかもソファで。

お蔭で体の節々が痛い。首を傾げただけで、関節がバキボキ鳴り響く。

寝惚けた頭で壁に掛けてある時計を見る。

時刻は4：44。捉え方によつては幸せと死遭わせに分かれてしまうような数字だ。

4という数字はややこしい。

死を意味したり、四つ葉のクローバーのように幸せの象徴だつたり。幸運と不幸が織り交ざつた数字である。

まあ俺は数字に不気味さを感じる事が少ないため、不幸の象徴やら  
と考えた事が無い。

だからといって幸運の象徴とも考えた事は無いが。  
にしても、体が痛い。一度とソファで寝るものか。

そんな事を心に決めながら、冷蔵庫へふらふらと向かう。

ちなみに俺の現在の住家はダイニングキッチンであるから、数秒で  
冷蔵庫に辿り着いた。

まあキッチンが別な場所にある家は相当な豪邸か、昔の建築物かの  
どちらかだろう。

ともかく俺は冷蔵庫の中身を探る。

……スカである。空。新品同様の中身無し。

ふざけるなよ、あの野郎。

そう思いながらも朝っぱらから怒声を撒き散らしたら近所迷惑にな  
る事だろ？

残念ながら俺は周りに氣を遣える男であるため、静かに財布を持つ  
て家を出た。

理由は簡単。24時間365日営業の利便性社会の骨頂、コンビニ  
に行つて朝飯を確保するためである。

早朝の街は妙な静けさを帯びながらも、深夜よりかは人の気配を感  
じやすい。

日の光というものは人を引き付ける効果があるのかもしれない。  
いや、生物皆、蛾のように光に惹き付けられる習性があるのかもし  
れない。

一体全体、光に何があるっていうんだ。

あんなもの、ただ眩しいだけじゃないか。

あんなもの、あんものこそ一番、穢れている。

ポケットの中で何かが振動する。

家に置き忘れたと思っていた携帯がメールを着信したためだ。

にしても誰だ？ こんな朝っぱらにメールなんてしてくるドアホは？

『ちいはシーチキンおにぎりが良い』

なんてメールを送つてくるドアホとドアホを足してドアホを掛けた  
ようなドアホは？

いやまあ俺の記憶が欠落していない限り、こんな生意気なドアホは  
一人しか思い浮かばないんだが。

つていうかアイツだろ？ 冷蔵庫の中身を空にしやがった張本人は  
「ハア……」

溜息を吐きながら携帯の待受け画面を見る。

画面の真ん中にデカデカと時刻が表示され、その右上に小さく何年  
何月何日何曜日かが表示されるシンプルな待受け画面。

今日は、11月8日月曜日。俺が転入生として高校に通う日だ。

「一輝、これシーチキンじゃないツナマヨ」

1時間近く朝の街を散歩し、コンビニで立ち読みをして、計一時間近く外に出でた俺が最初に言えに入つてから30秒後に言われた一言だ。

「別にツナマヨもシーチキンも変わりないだろ」

「変わるよ。大きく変わる。産業革命レベルで変わる」

絶対に大袈裟に言つてやがる。

「つーか、そんなに文句言つなら食うな。代わりに俺が食うから」

「一輝に食われるくらいなの」「として捨てられた方がマシってツナマヨが言つてる」

ツナマヨは喋りません。

俺は溜息を吐きながら先程から文句を言つてくる主の方を見る。

腰まで伸びきつた銀色の髪、左右で瞳の色が違つていわゆるオッドアイ。右が青で、左が黄色……じゃなくて琥珀色だけか。

ともかくそんな日本人と言つ枠組みを超えている容姿をしている少女。

名前は濁川千秋。にじかわちあき戸籍上は俺の義理の妹ということになつてゐる。

まあ、なんやかんやコイツとは付き合ひが長いから義妹と言つつかは幼馴染や親友とかの部類に入る気がする。

仕方が無く、俺の義妹である感じだ。仕方が無く。

そんな銀髪少女は散々文句を言つていたツナマヨおにぎりを一口で頬張り、口元にご飯粒を付けるという定番の絵面になつていった。

これを教えずに学校で恥をかく義妹の姿を見たいという悪意を持つて何が悪い、いや悪くない。

「ん？ 私の顔に何か付いてるの？」

あまりに俺が長い間千秋の顔を見ていた為、反射的にそんな事を訊いて來た。

「お前のやの色違いの田はいつ見ても不思議さを感じるな、て思つてたんだ」

「他人が気にしている事をやうつと書く。一輝つて本物じでリカシ一が無いよね」

「生活力が無いよりかはマシだ」

大体、二日前までゴミ屋敷だったこの家を一般生活が出来るレベルまで掃除してやつたのは誰だと思つていやがる？

俺だぞ、俺。

到着早々この家の惨状を目の当たりにした俺が、寝る間も惜しんで二日間！

カビやらゴキブリやら異臭やら何かよく分からぬキノコやらを撃退して、やつと終わつたと思つてソファに横になつたらいつの間にか寝ていて、体の節々が痛く、それでも朝食をと思って冷蔵庫を開ければ中身が無く、仕方が無くコンビニへ行つての途中にシーチキンおにぎり買って来いと言わたった上に、買って来たらツナマヨだと文句を言われたこの俺の感情が分かるか！？

銀髪でオッドアイだからつてお嬢様でも無いお前が料理、掃除、洗濯やらの家事全般が出来なくて良いわけにはならないだろ？が！

そもそも何なんだよ！　掃除をしている時だつて！

近所の方々は『あらカメラは何処なの？』つて完全にテレビの特番とかで掃除していると勘違いしているし！

そのまま立ち話を続けてこっちの作業を遅らせるし…　こっちの人員は独りなんだからわざわざ掃除してるときに邪魔すんなよ…つていうか有名なゴミ屋敷にすんなアア…！

「……一輝、全部口から出てるよ」

「お前に聞こえるように言つてたんだよ！」

このダメ人間精神満点の銀髪女がつ。

俺の自分用に買つてきた鮭とシーチキンと昆布のおにぎりを数十秒で食つて終わり

「ちよつと待つて！　今シーチキン有つたよね！？」

「黙れよ銀髪。一々細かい事こいつるなさいんだよ」

「細かいつて言つたか、わざわざシーチキンがあるのこいつこソナマ

玉『えたのー?』

「その自分のことをちいって呼ぶ癖をいい加減直せつて言つてんだろ。ガキじやないんだから」

「ガキとかガキじやないとかそういうの関係無いよー。ちいのシーチキンを取りやがつて、吐け!」

殴りかかるうとする千秋を片足で押さえつけながら優雅にお茶を飲む。

よし、朝食も取つたし、真面目な話でもするか。

「おい千秋。本当に居るんだよな?」

「……居るよ。間違いない。確認した」

両手をブンブンとアホのように振り回すのを止め、千秋が答える。

「三人だっけか?」

「一人に減つたよ。《否定定義》と《非観理論》が協力して《完全干渉》を倒したからね」

「それぞれの名前は?」

「《否定定義》は鋼冦梓美。（こうゆうさきみ）《非観理論》は虎杖紀重。（いたぢり きあ）その両名とも、今日から一輝が通う高校に居るよ」

「知ってるぞ。だからわざわざ俺はそこ高校に転入するわけだしなもう一口お茶を含ませた後、俺は面倒臭そうに言う。

「……《完全干渉》はもう反応無しなのか?」  
「案外そうじやないんだよね。面白い事に」「どうやって?」

「何が面白いんだよ」

「ヤニヤと不快な笑いを浮かべる千秋に俺は問いかける。

「まずは《非観理論》だけね、使用者（ヨーザー）が途中で変わってるんだよ

「どうやって?」

「前使用者の日記帳……正確には記録帳を見たら、簡単に次の使用者になっちゃったの」

「それが《完全干渉》にも起きてると?」

「そんな感じかな？ ちいにも詳細はよく分かんないから」「使えない女」

「酷ツ！」「

「そんな事より、もうそろそろ準備しないと学校に遅れるぞ」「ああ、本当だ」

慌ててどこかに行つた千秋。

俺はと言えば、そんな千秋の無鉄砲な行動を「バカだなあ～」なんて思いながらゆつくりとお茶を飲んでいた。

……つて、何で俺はそんなに優雅に過ごしているんだよ！？  
俺、今日が初日だからいつもより早く出なきゃいけないんじゃないのかよ！！

残っていたお茶を流し込み、バカにしていた千秋と同じ行動を取つていた俺がいた。

s2 (後書き)

あらすじ書かなきや いけなによな  
あ

コード。

俺や千秋はそう言つてゐる。

所謂、超能力や異能のようなものだ。

他には、仮想空間具現化現象などと言つた堅苦しく長かっただい  
名称もあるそうだが、俺達はコードと言つてゐるから、コードで統  
一する。

コードの概要は、自分のルールだ。言い換えれば、自分だけの極論  
や暴論。

それを能力のように使つことが出来る。

いくつかコードにも共通したルールがある。

一つ目。能力として使用できるルールは一人一つまで。変更はでき  
ない。

二つ目。コードは何かを指定しなければ発動できない。

三つ目。コードは現実世界では使えない、という風に誤認してしま  
う。

俺が知りつむ限りでは「この三つがどこのコードにも共通した事項であ  
る。

一つ目、二つ目までは異能系の漫画などでよくある設定だと思つか  
ら詳細は言わない。というか書いて字の如くだ。

三つ目に関しては、少しややこしい事になるため説明しにくいのだ  
が。

簡単に言えば、思い込みや先入観が先導して、結果、三つ目の共通  
事項が生まれたということになる。

まあそもそもこれら全て、俺が考査したのではなく受け売りなのだ  
が。

ともかくそんな不思議な能力（？）であるコードは、実は俺と千秋  
も使える。

使えるからといって、だからどうした、といつ話なのだ。

「濁川一輝にじかわ かずきです。父の仕事の事情でこちらに転入してきました。これから宜しくお願ひします」

自己紹介のときに黒板に氏名を書くなんてのは、アニメや漫画とのみの設定なのだろうか？

そう俺が思った原因是、単に自分が担任教師に黒板に名前を書いてくれと言われなかつたからである。

わざわざ自分から名前を書いたとしても、図々しい奴だと思われるだろうからそのまま言葉のみの自己紹介をした。

しかし驚いた。

自分の席は一番端の廊下側の一一番後ろの席だと思っていたのだが、ちょうど俺の転入に合わせて席替えなんてものをして、結局、俺は中央の一一番後ろから一番目というなんとも微妙な席に座られたのだった。

自分のくじ運の無さとその微妙な位置に俺は驚いた。

まあそんな事はともかく。

午前の授業を平然と乗り切り、昼休み。

当然、弁当など持参しているわけもなく、行きの途中でコンビニに立ち寄る時間もなく、虚しい昼を送っている最中、千秋からメールがあつた。

『ちいのお昼ご飯がない。ぐださい』

間髪入れずに返信には『だが断る』と打ち、俺は自分の教室を出で校内の散策を始めた。

出た理由は簡単。

なんとなく、そろそろクラスの奴らの一人が一人が話しかけてくる様子を取つていたからだ。

人と接するのが苦手、というわけではないが、あまり交友関係を無駄に広めても行動しにくくなるだけである。

だから余り人と喋らない根暗な性格を貫き通そうと意識した結果、こんな行動を取ったわけだが。

「一輝、弁当」

廊下を適当にぶらついていたら千秋と会った。まあなんたる偶然。俺に差し出してくる千秋の手にぶつ刺すシャーペンが無くてガツ力りだ。

「千秋、情報」

もう千秋とは学校で会つても一度と口を利かないことを心の中で誓いながら、俺は千秋に聞く。

「それより弁当」

そう返してきた千秋の頭を驚掴みし、無理やり場所を移動する。つていうか「コイツは何だ？ 何なんだ？ 朝から俺をまるで自分の執事か何かと勘違いしてるとんですか？」

「痛い痛い痛い痛い、ごめんなさい放して」

謝辞を入れてきたので俺は仕方が無く、千秋の頭を放す。

「《否定定義》と《非観理論》についての情報。今すぐに言つ」

「今、鋼凧梓美也虎杖紀亜もそれぞれの教室で昼食を取っています。ちいもお弁当食べたいなー」

「お前、自分の事をちいとか言つて恥ずかしくないの？ それともわざとキャラ狙つてやつてるの？」

いい加減、昔からの癖を直せよ千秋。溜息を吐きながら俺はそういう。

しかし、《否定定義》《非観理論》の両者とも接触をわざと避けているのか。

それとも、定期的に……例えば校外やメールのやり取りなどで接觸しているのか。

こちとら早く、この一人と接觸したいんだが。まあ焦つても仕方がないか。

ともかく千秋に一人を見張らせておくのが一番無難だろ？

「おい、千秋」

「ちょっと待つて。一人とも動いた」

千秋が何か携帯とかを見るわけでもなく、焦点が合っていない視界のまま俺に言つ。

「一人はどこに？」

「……特別教室棟の階段、多分そこに向かってる」

「わかった。行ってくる」

「え、もう仕掛けるの！？ 早過ぎない！？」

今度はしっかりと俺に焦点を合わせて、千秋が反対してくる。

「殺し合いをするわけじゃない、話し合つだけ。それと少し教えてやるだけだ」

「絶対に争い」となると思つ。ならなかつたら奇跡」  
ジト目で俺の評価を表してくれるなんて、なんて妹だ。あとでお仕置きが必要かもしれない。

「あつちが一方的に警戒して攻撃をしかけてすべて失敗するだけだ。何の問題もない」

コードは火を出したり、水を操つたりする魔法的なものじゃない。  
まあ使い方によっては出来るだろうけど、そんな最初から物理的破壊をもたらすような危険な代物じゃない。

限りなく、周りに被害は出ないだろう。

「…………特別教室棟、2階と3階の間の踊り場に一人とも集まつたみたいだよ」

千秋が正確な位置を教えてくれたため、俺はいそいでそこに行く。  
まあでも、見送りまでジト目じゃなくても良いじゃないか千秋さんよ。

s3 (後書き)

展開早いよね。 さうだよね。  
まあ まだ まだ よりも マシか。 マシかな?

「本当にありがとうございました虎杖君。貴方のお蔭でテストはバツチシ  
「いやー、もう僕は何も言えないよ。《非観理論》をカソニングの  
為に使う破目になるなんて」

男子高校生と女子高校生の話し声が聞こえる。

……って当たり前か。ここは高校なわけだし。  
しかしこの特別教室棟つてのは白昼なのに人気が無い。放課後にな  
れば部活などで賑やかになつたりするんだらうけど。  
まあそんな事はどうでもいい。

さつさと俺も《否定定義》と《非観理論》のお喋りに参加しなきや  
な。

「いやー、それは確かに驚くな。『コードをそういう風に使つとは』  
「……ッ！？」

三階の踊り場に登場した謎の学生を最初に見たのは《否定定義》使  
用者である鋼凧梓美。

後に続いて《非観理論》使用者である虎杖紀亞も謎の学生を見上げ  
てくる。

謎の学生たる俺は平然とした顔で「あ、ドヤ顔決めといった方が良か  
つた」なんて事を思つていた。

「誰？ 虎杖君の知り合い？」

「……いいや違う。今日ウチの学校に来た2年の転入生だ」  
「別に《非観理論》を使って調べなくたつて名乗つたのに  
俺の口から《非観理論》という言葉が出た事によつて、さらに入  
が警戒を強める。

ん~、なんかマズい。この一人に漂う緊張感は完全に臨戦態勢を整  
えてるつて感じだ。

別に暴力やコードを振りかざして一人を屈服させよつとなんて微塵  
たりとも考えていないのに。

「どうせそつちには《非観理論》があるから自己紹介する必要も無いんだけど……まあ、小さい時に散々仕込まれた事だからな。礼儀は通さなきや」

戦闘前の敵キヤラとかが言いそつた台詞だなあ、なんて若干傍観者を気取りだした内心を無理矢理引き戻し、俺は一人に自己紹介をする。

「俺の名前は濁川一輝。使うコードは《無影無踪》。自らと自らが触れた物質を消し隠す事が出来るんだ」

「コード……？」

鋼凧梓美の方が俺の言葉に少しばかり首を傾げる。

「仮想空間具現化現象とも言つ。けどそれだと長いし、コードって言つ方が短くてカッコいいだろ？」

まあ正直なことを言えば、俺はカッコいいからコードと言つている。「俺がこの学校に転入してきた理由は二つ。一つはぐうたら妹の生活改善のため。一つは、お前達二人だ」

「……わたし達を殺しに来たっていうわけ？」

「《完全干渉》やお前と一緒にするなよ殺人鬼。俺はもっと穏やかな人間だ」

鋼凧梓美は少し眉を動かし、虎杖紀亜は苦笑いを浮かべる。

「俺はまあ、簡単に言えば、お前達を独断で審査しにきた」「審査？」

鋼凧梓美がまた首を傾げてくる。虎杖紀亜の方は完璧に口を挟まない氣でいる。

まあ話す相手は一人の方が楽か。

「お前たちは分かつてゐるだろ？が、《否定定義》と《非観理論》の組み合わせは非常に危険だ。過去、未来、現在の情報の全てを掴みきつたと言つても過言じやない」

「それで危険因子であるわたし達を独断と偏見で審査して、結果、本当に危険だと貴方が判断したら？」

「当然、殺す」

俺がそう言った途端、鋼冂梓美が何かを投げてきやがつた。

俺はその場から一歩姿を消し、何かが通り過ぎた後、また姿を現す。

「それが『無影無踪』？ 逃げが中心のルールみたいね」

「ドアホ。人の話を最後まで聞くように、両親に教わらなかつたか？」

「生憎、その両親は小さい頃に田の前で殺されかけやつてね。わたしはあんまり両親に教わつたことを信じじてないの」

「そりや、『ご両親が恵まれない』

「別にそんなのわたしには関係無いつ！」

鋼冂梓美は勢いよく階段を上つて、俺との距離を一気に詰めよつとする。

このお転婆娘が、別に俺はあんた方と戦つ気は無いのによ。

俺は後ろへ下がり、どうにか廊下まで退く。

「随分と逃げ腰じやない。殺すんじやなかつたの？」

「殺すのは判断後だ。まだ判断すらしちやいない」

「なら良かつたじやない。良い判断材料ができる」

ああそうかい。このお嬢さんは俺の答えなど聞いていないといふわけかい。

上等だ。お兄さんに喧嘩を売つたらどうなるかを身を持つて知るが良い。

「そこまで死にたきや、さつさと死ねよ」

直後、二階の踊り場が丸ごと消える。

『無影無踪』。自らと自らが触れた物質を消し隠すコード。

そしてそれの使用者は俺である。俺が居た……足で触れた場所は隠す事が可能だ。

「さて、問題です。俺は先程までどこに居たでしょつか？」

「…………ッ否定！－！」

自由落下しかけていた鋼冂梓美の体は尻餅をつぶよつて踊り場に落ちる。

『否定定義』。ルールを無効化するコード。

つまりそれは、相手の理論である「コードをも無効化できる」という事。

一筋縄ではいかない相手だ。

……って違う！ 相手じゃない！ 僕は平和的にことを進めようと思ったのに！

いつから少しバトルっぽくなつてんだよ、バカか俺は！

あー、これは千秋に怒られる。絶対に怒られる。そして弁当と言われ続ける。

つていうか。

「おい、お前スカートの隙間からパンツ見えてるぞ」

ホント、最近のスカートって短いよな。冬場とか絶対に寒いだろうに。どうするだよ。

まあミニスカよりかは長いけども。本当に冬場どうするんだよ。つていうか今冬場だろどうするんだよ。

「…………殺す」

物凄く冷淡でまるで機械のような冷たさを感じる声が鋼仮面から発せられる。

あー、俺の発言一つ一つが平和という文字をぶち壊していくなんて。

もう一つその事、俺のコードは《平穀崩壊》に改名したほうが良いんじゃないかな？

鋼仮面の右手にはシャーペンが握られている。

ただの文房具だとは思うが、人によっては目に突き刺して凶器へと変貌させる天才がいるんだ。極稀に。

そしてそういう天才の雰囲気を今、鋼仮面は纏っている。

まあ平和とは少しけ離れたが、ここは一つ遊びを、「かくれんぼでも、始めようじゃないか」

## s4 (後書き)

やつぱりバトルっぽくなると俺ってグダるなあ

.....

先程から何度か、鋼冨に姿が見つかってしまっている。というよりは《無影無縫》を無理矢理《否定定義》で無効化せられて見つかっているのだが。

### 《否定定義》

あらゆるルール……物理法則や常識、やつには「コードなどを無効化できる中々強く厄介なコードだ。対する」）」ちは《無影無縫》。

自らと自らが触れた物質を消し隠す」ことができる「コード。しかし消した物質は《否定定義》によつてすぐに元に戻つされてしまう。

だからまあ普通に考えたら、《無影無縫》が《否定定義》に勝てるわけがないのだ。

真正面から渡り合えば、の話だが。

さて、そろそろ《無影無縫》の本来の使い方をお嬢さんに教えてあげようか。

「……チツ、ビニに行つたあの変態」

鋼冨は特別教室棟の廊下にてボヤく。

謎の転入生の姿は何度か《否定定義》を使って、捉えてはいるものの、すぐにまた《無影無縫》によつて姿を消されてしまう。しかしそれでも転入生が特別教室棟にいることは分かつている。（……しかし、本当に何なの？ あの転入生は？）

虎杖に《非観理論》を使わせてもう少し調べ上げていればよかつたと、鋼冨は少し後悔する。

《否定定義》は「コードによる相手の小細工、策略に対しても強い。

しかし無効化するだけであるため、自らが小細工や策略に気付かなければ意味がない。

鋼冂自体が相手の行動を先読みするようなことを苦手としているため、情報戦そのものが弱点となつてゐる。

鋼冂の予測では、あの転入生はそういう小細工や策略などが得意なタイプだ。

決して真正面から対決せずに相手の背後を刺すような、そんなタイプの人間だ。

(……虎杖君のところに一旦戻ったほうが良さそうね)

#### 『非観理論』

過去未来現在のあらゆる事象が観測できるコード。そしてあらゆる者から観測されないコードもある。

しかし『非観理論』を使って観測した事象には言動、行動などの手段を持つとして干渉することが出来ない。

だが、『否定定義』を使えば、その制限を無効化することができる。つまりは、あらゆる事象の結末を観測することが可能なのだ。そしてその結末を変えようと足搔くことも可能となる。

簡単に言えば、相手がどういう小細工や策略を仕掛けてきてどういう結果になるのかを予知することが可能となるといふことだ。目的変更し、階段へ向かおうとする鋼冂。

しかし、進行方向の廊下の床が姿を消した。

直後、鋼冂が今まで歩いてきた廊下の床が姿を消した。

「…………否定」

近くに居る、と直感的に感じ取った鋼冂は迷う事無く『否定定義』によつてコードを無効化する。

『無影無踪』の厄介なところは見えないといつことだ。姿を捉える事が出来なければ、攻撃が当たらない。

だから迷う必要無く『否定定義』によつて無理矢理、姿を現させて攻撃を加えればいい。

その考えが間違えだつた。

「動くなよ」

鋼凪が間違いに気付くのはすぐだった。

転入生は鋼凪の田の前に現れ、包丁を首筋に当ててきたからだ。

「そんなの、持つてましたっけ?」

「いいや、これは学校のだよ。借りてきたんだ」

借りてきた?

鋼凪は転入生の言葉に疑問を抱くも、それを口に出す事はできない。不用意に喋ろうとすれば、包丁で斬りつけられてしまう可能性があるからだ。

「まあこれでやっと、落ち着いて話し合えるな

『無影無踪』の正しい使い方。

それは言つまでも無く物を消すことだ。といつかそれ以外何も出来ないのが『無影無踪』。

だからそれを最大限に活用する。

例えば鍵が掛かつて開かない調理室に入りたい時。ドアを丸ごと消し、無理矢理、侵入する。

例えば机や棚などで何処に仕舞つてあるか分からぬ包丁を探す時。棚や机を消し、入っている物を全てを無理矢理、外に出す。

この二つだけでもう窃盗し放題ではあるのだが、残念ながら俺は泥棒じゃない。

散らかした物はしつかり仕舞つて来た。証拠隠滅のためであるが。得物の調達が終われば、あとは気になるあの子を振り向かせるだけである。

……いや正確には抑止させて、話し合いに持ち込むだけなのだが。パターンとしては色々あるが、一番楽で一人つきりで話せるものを選択した。

ようは退路と進路を消し、首に得物を突きつけて相手の動きを抑制

するものだ。

そして今、それは見事に成功し無事に話し合いで持ち込むことが出来た。

「めでたし、めでたし」という事だ。

「ええーと、『否定定義』。言っておくが審査と言つても見る要点は一つだけなんだ。ほぼ確実にお前達を殺すこととは無いと言つてもいい

「首に刃物突き付けておいて、そんな言葉が信用されると思つてるのは？」

「お前が思う思わないじゃない。俺は真実を話しているだけだ」  
おおよそだが鋼屈よりも、虎杖紀亞の方が絶対に話が通じる。

「いっは人の話を聞く訓練から小学校でし直してこい。

「見る要点の一つはお前達の情報網。簡単に言えば、他にも通じてるコード使用者がいるのかって話だ」

「殺した奴は一人いるけど、今のところはわたしは虎杖君と貴方だけよ」

「…………ついことはこっちが先だったわけか

「…………何を言つてゐるの？」

「別に。こっちの話だ。それよりも

「そこまでです」

背後から聞こえた声に、俺は田だけを向ける。

そこに居たのは千秋と虎杖紀亞だった。そして千秋は相変わらずジト目で俺を見ていた。

まあ確かに、殺し合わない言つておいて女子生徒の首筋に刃物当てるますもんね。

完全にこれは千秋に怒られる。

s5 (後書き)

ほらやつぱりグダつた。  
戦闘グダつた。もうダメだ俺。 戦闘無理だ。

「一輝言つたよね？　問題無いつて」

「……はい」

「で、一輝はわざ今まで何をやつていましたか？　ちいに分かり易く説明してみてください」

「……なあ、お前いい加減ちいつて呼ぶの

「つべこべ言わずに早く。ナウ」

「……『否定定義』のコード使用者である鋼凧梓美が好戦的な態度をとった上に殺意をむき出しにされて自分の命の危機を感じましたから、自己防衛のため、鋼凧梓美の首筋に刃物を突き立てて抑止していました」

叩かれた。千秋にジト目で思いつきり俺を叩いて来た。

「一輝が交渉とかには向いていない事がよく分かった」

「俺は交渉とかに向いてないわけじゃない。お前よりは向いてる自信がある」

「分かつた言い直す。一輝は平和的交渉には絶望的に向いていない事が詳しく理解できました」

「……返す言葉もございません」

いや別に俺が、俺のみが完全に悪いわけじゃないと思うんだよ。鋼凧にも非はあるし、そもそも鋼凧が仕掛けで来なければこっちは争う気なんて微塵も無かつたんだから。

俺のみが怒られるのは不公平って言うか……まあ公平なんてものがあるなんて信じては無いけど……絶対に千秋の言い方だと俺が10割方悪いように感じるじゃんなんか。

気に食わないな……気に食わない…………。

「ウチの一輝が、本当に失礼しました」

まるで犬が誰かを噛んだりした時のように千秋が謝る。

いや、俺は犬ですか？　躊躇が成つてない犬とでも言いたいんです

か？

「いえ、口クに話を聞かないで喧嘩を吹っかけた僕達も悪いわけです」

虎杖も、まるで犬同士が吠えあつた時のように苦笑いをしながら謝る。

ちょっと待て。鋼皿が犬だろうがネコだろうがダードリが構わないが、俺をそれと同種のように扱うな。

俺はあんなにバカじゃない。アイツと同種にされるのだけは「免だ。

「ちい……私たちがそちらに接触した理由は、偵察の一環なんです」「審査って、さっきは言つてたんですけど？」

「まあ審査もあながち間違つてはないんですけど。私たちはあるコード使用者を探してゐるんですよ」

千秋の言つ通り。俺たち……正直言えれば、俺があるコード使用者を探している。

「そいつを見つけたらどうするんですか？」

「半殺しだ」

虎杖の問いに、千秋の代わりに俺が答える。

「あいつのコードを奪つて、精神を壊して、牢獄ヘブチ込む」

「なんだ。わたしとなんら変わらないじゃない、貴方も」

「変わるさ。殺すなんて生温い方法を取つてお前とは」

口を挟んできた鋼皿をすぐに否定し、また睨み合いになる。

つていうか鋼皿を睨んでたら、千秋に蹴られた。痛い。

「ともかく私たちが搜してこいるコード使用者は危険なんです。世界レベルで」

「……それで僕の『非観理論』を使ってそのコード使用者を探そぐと？」

「ちょっと違います。『非観理論』でも見つかるかどうか怪しいので、そんな曖昧なものには頼りません」

虎杖は少し驚いた顔をする。

まあ本来、『非観理論』は全ての事象を観測できる。

でもコードを使えば、その監視の目を掻い潜る事だって可能だ。

虎杖が驚いたのは、こいつがまだそれ程多くの……『否定定義』と『完全干渉』の一いつのコードしか近くに無かつたからだろう。

「私たちが接触した理由は、私たちが追つているコード使用者がそちらに接触してないかを確かめるためです」

『否定定義』と『非観理論』。

この一いつが揃えば、無限に未来を予知できる。

出来れば、味方につけたいコンビである。まあ俺は鋼凪とは気が合わないと思うから味方に付けたくないんだけども。

ともかく俺が追つてるコード使用者は今何処で何を考え何をしているかが分からぬ。

だからまずは悩みの種を摘み取っていく。

取り敢えず、こいつらはまだコード使用者に会っていない。

だが、後々接触される可能性がある。だから俺はわざわざこの高校に監視目的で転校してきたわけだ。

「一輝は少しはしゃぎ過ぎましたけど、私たちに敵意はありません。できればそちらと協力したいとも思っています」

「絶対に嫌だ」

嫌な気が合う俺と鋼凪は同時に言い、その直後、俺は千秋に踏みつけられた。

このヤロウ、絶対に後で覚えておけよ。夕飯はお前の嫌いなピーマンとナス炒めにしてやる。

「ま、まあこっちも多分……最低限、僕は敵意がありませんのでそちらに協力したいと思います」

踏みつけられている俺の姿を見て、口を押えてバカにするように鋼凪が笑っていたので俺は唸り牙を剥きながら威嚇していた。

……じゃなくて、苦笑いをしながら虎杖が返事をする。

取り敢えずこれで、千秋と虎杖の協力関係は結ばれたわけだ。

ただ一つ言える事があるとするならば。

その後、放課後の体育館裏で俺と鋼凪が喧嘩をしたことを知つたら、

もう次は千秋が激ギレして折檻してくるかもしれないという事だ。

「…………チツ」

転入初日の騒動から数日後。  
俺が起きた時刻は4：27。

いつも学校に行ってる時間は7：00。  
遙かに無駄に早起きしてしまった模様だつたため、朝食と弁当を作つたりしていたわけなんだが……。

現在時刻は6：30。

そろそろ眠り姫、千秋を起こしに行くべき時間か。  
つていうかアイツ。そんなに夜更ししてるわけじゃないのに、むしろ夜の8時には寝てるような子供のような生活を送っているのに、何でこの時間までブツ通しで寝れるんだ？

……まあ一番打倒な理由は精神的な疲労だろ？。

容姿のことだとやかく言われないわけが無い。俺は知らないがイジメなどもあるかもしない。

まあイジメなんて物をされれば、千秋はその倍返しで相手の精神をズタボロにぶち壊すこと間違いないが。

「入るぞー…………」

元「コミ屋敷」、現俺の住処であるこの家。

2階まである一戸建てで、まあ物凄く広いわけでは無いが、家族単位で暮らすには問題無い広さがある。

その2階の部屋の一つのドアを開け、俺はノックもせずに中に入る。千秋の部屋。ベットとクローゼット、それに縦長のデカくて全身が見れる鏡……姿見が一つ置いてあるだけだ。

まあ本来なら無駄なプリントやらペットボトルやら缶やらが散乱していたのだが、つい最近、俺の手によつて全て片付けられた為、現在はこうしてシンプルかつ綺麗な部屋となつてゐる。

……んな苦労話はどうでもいい。

ベットに薄いタオルケットを一枚掛けて寝ている千秋。

秋も暮れ始め、もう一ヶ月しないうちに12月になるのにタオルケット一枚は寒からうに。

「おい、起きろよ眠り姫

そう言つてタオルケットを引き剥がす俺。

そして、その直後、静かにまたタオルケットを丁寧に掛けて上げたのは、決して千秋を可哀想だと思ってやつたわけじゃない。まさか義妹であり幼馴染のようなものであり親友でもある千秋が裸ワイシャツで寝てるとは思わなかつたからです。

裸ワイシャツでタオルケット一枚…………こいつは風邪を引きたいのか？

「おい、千秋。さつさと起きる。学校遅刻するぞー」

無理矢理起こす方法から、体を揺さぶつて起こす方法にチエンジ。数秒後、のそりと千秋が起き上つてきた。機嫌が悪そうな顔をして。

「……ちい、吐くかと思った」

「吐く物も食つちゃいないだろ。さつさと朝飯食え」

そう言つて俺は千秋の部屋から出て行き、1階に下りダイニングに一人分の食事を用意する。

俺はもう千秋を起こしに行く前に食い終わつてゐるから、千秋の分だけを用意する。

十数秒後、千秋が騒がしく階段を下り制服姿で俺に向かつて喚き散らす。

「一輝！ 見てないよね！？ ちいのその……見てないよね！？」

「ああ、見てない。それにしても人間の体つて凄いよな。昔は貧相だったものも今では大きく豊かになつてゐるんだものな。俺さつき驚いたやつたよ」

「それつて何の話！？」

「にしても裸ワイシャツにタオルケット一枚は止めておけ。もうそろそろ寒くなつてくるんだから風邪引いちまつぞ」

「見たなあ！？」

千秋が朝から柄にもなく無駄に大はしゃぎしている。何故だろ？  
あ、バカで寝起きだからか。

「おいおい千秋、胸倉を掴むな。行儀が悪いだろ」

「行儀も礼儀も仁義も知つたものかあ！ ちいの恥ずかしい姿を見た限り、一輝の死は確定しているう！」

「恥ずかしいと思うなら、ちゃんと服着ればいいじゃないか。それに俺はお前の裸を見たわけじゃないし、ワイシャツ越しだつたし。それと後、下着越しでもあつたな」

「だからその下着姿が恥ずかしいってちいは言つてるの！」

「ワイシャツが有つた。問題無い」

「うるさい黙れ一発殴つて記憶を抹消してやる一輝のバーカ！」

「ハア…………… 6：42。賢いお前なら意味分かるよな？」

俺が現在時刻を言つた途端に急いで朝食を摂り始める千秋。

本当、バカつて扱い易くて楽だわ。

そう思いながらテレビを……付けたくても我が家にはそんな物は無いので、新聞を……読みたくても我が家はそんな物を取つていない。

仕方が無いので、携帯でニュースを見る。

政治、経済、その他諸々。スポーツと芸能は除いてる。興味が無いからだ。

暇ならニュースを見る。義父……まあ俺と千秋を引き取つたクソ野郎に昔教え込まれたことの一つで、俺にとつてはちょっとした一環になつてきているものだ。

ニュースは出来事の断片的な部分しか伝えられないが、多くの情報を得られる。

その多くの情報の中には、時々コード使用者が起こした事件も含まれている可能性すらある。

それに、「コードなんて異能を持っていて悪用をしないのは平和ボケで頭がマンネリ化したような奴かよっぽど正義に憧れたバカ野郎しか居ない。

だから月一のペースでコード使用者が起こした事件が入つてゐるはず

だ。

そんな風に、義父は言つてたような気がする。  
まあその後に、その事件を見つけられるかどうかはお前の洞察力や  
直観次第だけだ、と付け加えていたが。  
直観なんて哲学的な言い回しでムカついたことを今でも覚えている。  
しかしまあ…………。

「送検中の強盗致死罪の男が逃走。今朝方、この市内で目撃された  
情報あり……か」

「普通の人からしたら怖いね、それ」

朝食を呑み込みながら、千秋がそんな感想を呴く。  
まあそうだろう。普通の人も、普通じやない人も警戒すべき事件だ。  
この市内は思つたよりも物騒かもしだれない。

グダる。 いつそ、 もう本番へ入ってしまおうか?

「……え、今なんて言つた?」

放課後、千秋に呼び出された俺は、誰も居ない、なんとも不気味な教室にて話を聞いていたのだが。あまりにも唐突で、といつか予想の斜め上なことを言つてきただので、もう一度と聞き返してしまつた。

「だから、今日ウチに梓美ちゃんと虎杖君を招いて親睦会をやるわと思つ……」

分かつた。千秋はきっとアホなんだ。

「……ねえ一輝。ちいの話聞いてる?」

「聞いてない。聞かない。聞きたくない」

「何? 梓美ちゃんが来るのが恥ずかしいのお?」

よく分からぬが、多分アホの千秋なりに俺をからかおうとしているんだろうつ。

しかし残念。俺は少しでもムカつく台詞を言われると徹底的にそいつを虐めたくなつちゃう性格なのだ。

「……嘘である。しかし千秋の場合は、それは真実になる。

「まあ恥ずかしいな。わざわざ家に来てもらつてお前の裸ワイシャツ姿を見て帰つてもらうのは。いくら義兄でも恥ずかしい」

「いや、あれはそのええと……つていうか見たんでしょ! ちいのその……朝の姿!…」

「見た見ないはこのさい関係無い」

「関係ある!」

「重要なのは、お前がはしたない姿で寝ていた事だ」

「うつ…………」

「お兄ちゃんは驚きだ……まさか妹が……血が繋がつてはいないと  
はいえ、俺の妹がそんな変態趣味に目覚めたなんて……」

「変態趣味って何!? 一体、ちいが何に目覚めたつていうの!?」

「露出だろ？」

「田覚めてない！」

「いいよ、もう。自分に嘘を吐かなくたって。お兄ちゃんは驚かな  
いよ、妹が露出狂でも」

「そこはむしろ驚くべきでしょー? つていつかちには自分に嘘な  
んて吐いてない！」

「もつとい……お兄ちゃんは妹が露出狂でも見捨てたりしないから。  
むしろ喜ぶから」

「喜ぶつて何! ? 一輝の方が変態じやない! ?」

「バカ野郎! 男は皆、変態なんだよ! おっぱいに至福を感じる  
んだよ! ?」

「～～～～ツ! ! 变態! 最低! 一輝なんか死んでしまええ  
! ?」

「さて、千秋を一通り弄り終わつたとこりで」

「今までの全部[冗談だつたの! ?」

「ああ冗談だ。男は皆、変態なんかじやない。男は皆、狼なんだぞ。  
覚えとけ」

「まあ確かに一輝は狼っぽいけど……」

「俺が狼? つまりそれって………。

カッコいいって事か! いやあ、千秋も嬉しい事を言つてくれる。  
本来なら狼つてのは嘔吐きや独りぼっちとかを意味するのに、カッ  
コいいという風に使うとは。

中々良いセンスしてるじゃないか千秋。  
まあそんな事はどうでもいい。

「鋼凧と虎杖を誘つて、ウチで親睦会をしてもいいぞ」

「えつ! ? ホントに! ?」

「ああ。一応あの一人には色々言わなきやいけない事があるし……  
追加で忠告もしどきたいしな」

「……忠告?」

「まあともかくウチで色々と話をしよう。千秋は一人を誘つてくれ。

俺は……まあ料理でも作つて待つてるよ

「分かつた」

そう言って、千秋は教室を出て行く。

さて…………… 鋼盆が嫌いな料理は何だらうか？

＝＝

濁川家に四人が集まり、取り敢えず堅苦しそうな俺の話は後回しで料理を囮んだ。

そして大方、食事が終わつた頃。

「濁川先輩つて、モテますよね」

まさかそんな言葉が鋼盆から出るとは思わなかつた。

余談だが、鋼盆と虎杖は高1。俺と千秋は高2なので一応あの一人は俺たちの後輩という事になる。

それでこの言葉だ。

さらに余談だが、鋼盆は例え自分が死ぬとしても俺に敬意を払うつもりなど微塵も無い。

つまりこの台詞を言われたのは俺と同じ苗字を持つ、千秋である。

「そんな事ないよ。告白とかされた事ないし」

「またまたご謙遜を。ウチのクラスでも時々噂としてでますもん」

そりや、銀髪でオッドアイなんてブツ飛んだ容姿をした奴が学校に居ればいやでも噂になるわ。

まあそれに千秋は何故だかお胸が豊かだし、顔だつて整つている。ダメ人間つぶりを知られない学校では、モテるだらう。

「噂といえばカスも最近噂になつてますね」

「カスじゃない一輝だ」

クソバカの鋼盆が何故だかわざわざこつちに話題を振つてきた。  
しかし俺の噂？ こいつとの喧嘩以外は特に何かをした覚えはないんだが。

「誰も近付けようとはしない孤独でキザな転校生。まあでもその実態は覗き趣味の変態よね」

「変態は俺じゃない、千秋だ。履き違えるな」

「…………えつ？」

鋼冂は俺の台詞の意味が分からずフリーズして、千秋は顔を赤らめて下に俯いてしまっている。

いやあー絶景。面白いくらいに良い眺めだなあ、おい。

まあそんな事はどうでもいいか。そろそろ本題に入ろうつか。

「で、どうだつた…………俺が作った飯の感想」

「これ、一輝先輩が作ったんですか？ つてきり僕は千秋先輩が作つたんだと……」

両方ともに敬語を使つてくれる虎杖。いや偉い。鋼冂は是非見習つべきだ。見習え。

「ちい……私は料理とかあんまり上手じゃなくて。一輝に作つて貰つてるの。美味しいでしょ？」

「せ、先輩。冗談はよしてくださいよ。こんなに美味しい料理をこのカスが作れるわけがないじゃないですか」

「何言つてるんだよ。俺はわざわざお前が嫌いそうな料理を精一杯憎悪を込めて作つてやつたんだぞ。感謝しろ」

「すいません濁川先輩。食べた料理を吐きたいのでトイレを貸してください」

「おい鋼冂。その前に一つ聞くが……案外割と美味しかったろ？」

「美味しくない、むしろ不味かつた。ゴミ溜めに捨ててある生魚のような味がしたわよ」

「おかわりしたのに？」

「してない」

「僕の分も搔つ攫つていつたのに？」

「くつ…………」

虎杖も雪辱を晴らすように、鋼冂へ言つ。

つていうか取られたのに何も言わなかつたのかよ……。

「まあお前は素直に『美味しかったです。すいませんでした』って  
言えばいいんだよ」

「何で謝んなきゃいけないの！？」

「俺の台詞にまさかの鋼盆ブチ切れ。しかし謝るのは当然だろ？  
『お前、プライドのせいだわざわざ食材を無駄にするところだつた  
んだぞ。魚を取るにしろ、野菜を育てるにしろ、肉を得るにしろ、  
手間が掛かるんだぞ。本来なら土下座ものを寛容な俺は言葉で謝る  
だけで許してやるって言つてるんだ。さあ早く』」

「一輝、無茶苦茶…………」

千秋が呆れる様に言つたが、とにかく俺はこの鋼盆に謝らせたいのだ。  
理由？ そこに鋼盆がいるからだよ。

いい加減、ゲームを始めようかな?  
いいやまだか。いやもういいか。いやまだだ。

「……美味しかったです、すいませんでした」

鋼屈敗北。俺勝利。

いやあ、物凄く気分が良い。余の気分は最高潮だぞ。ハーアハッハ  
ツハ！

……少し反省しようか自分。

「そう言えば一輝。なんか教室で一人に話があるつて言つてたけど  
「ん……ああ、そうだな」

千秋の発言で俺は真面目モードに入る。

……つていうか、俺に真面目モードなんでものがあるのだろうか？  
まあ、どうでもいいか。

「そういえば千秋。《完全干渉》の件はどうなった？」

「んん……あれはまだ市内にいるよ」

「ちょっと待つてよ。《完全干渉》って言つたの？」

険しい顔つきをしながら鋼屈が俺に問つてくる。

「ああ。だがまあ安心しろ、お前が今危惧している事は起こつてい  
い」

「…………？ 何を言つてるの？」

「虎杖の《非観理論》は本来のコード入手法以外で手に入れただろ。  
それと同じ事が《完全干渉》にも起こつてる。詳細は不明なんだが  
な」

「…………僕が日記帳を見たみたいに、誰かが《完全干渉》が残した何  
かを見たつて事ですか？」

「そういう事だ。つまりまあこの市内に《完全干渉》のコード使用  
者がいるつて事になるんだが」

俺は一旦言葉を区切り、少し間を空ける。

理由は簡単。

この先の言葉はあくまで俺の予測であつて確証がない。だから言つ

必要が無いかもしぬないと思つたからだ。

でもまあ、可能性が低いわけではない。一応言つておくか。

「この市内だけでコード使用者が6人以上いる状況になつたかもしれない」

「6人以上？」

千秋が少し驚いたように聞いて来る。

「ココに居る4人。そしてこの市内にいる《完全干渉》。そして今朝方の逃走犯。誰かが逃走の手助けをした可能性があるから6人以上だ」

「……逃走犯って、朝のニュースでやつてた奴ですか？」

「ああ」

虎杖の確認に、俺は短く答える。

「ちょっとニュースの記事を見ておかしな部分が有つたら調べてみたんだ。当時の大まかな状況、それと逃走犯が捕まる以前に何をやらかしたか。どちらとも調べたんだが、おかしいんだ」

「何がおかしかったんですか？」

「直観的に、おかしいと感じた」

「…………カスは頭の中もすっからかんという事が分かつたわ」

「一輝、もう少し論理的に考えようよ」

鋼凧にバカにされた上、悟つたような声で千秋にもつともな事を言われた。

こんな屈辱は初めてだ！ このクソ野郎共が！

俺だって論理的に考えたいが、相手のコードが分からぬ上に、コードによつて事実は変えられてんだから論理的に考えるのは不可能なんだよ！

比較して変わつた部分を見つけるにしても、変更前の情報がない。だから論理的に考へるのは不可！

「上等だ、この尼ども！ 証明してやるよー」

「一輝。言葉遣いをもうちょっとと考えよつよ。そんな興奮しないで「尼？ なんでいきなりア〇ゾンが出て来るわけ？」

何なんだこの女一人は！

千秋はさつきから俺を諭してくるし、鋼冂に関しては尼は隱語じやないほうの意味なんだよバカヤロウが！

ああ、だから言うのを躊躇つたんだ。ほぼ確實にこうなるから。

「でもなんでそんな風に思つたんですか？ 直觀以外にも理由があるから言つたんじゃないんですか？」

「ほぼ経験則だな」

「虎杖君、このカスを相手にしてたら自分が疲れるだけだから氣を付けた方がいいよ」

この四人の中の唯一の良心、虎杖に忠告する鋼冂。

まあ確かに、疲れるだけだから反論もできない。

「ともかく、この市内にコード使用者が集まつてゐる傾向にあるってことだ」

「あ、一輝が無理矢理話を進めた」

こら、千秋。余計な事を言つんじやない。鋼冂が食いつくだろうが。「と、いうか、別にコード使用者が集まつたとしてもこっちが不用意に力を使わなきゃお互い気付かないんじや？」

お、鋼冂はそつちに食いついたか。よかつた。

「おいバカの鋼冂。一つ良い事教えてやる」

「何？ 言つてみなさいよカス」

「ここに集まつてきているコード使用者の目的は《非觀理論》だぞ。

不用意とかは関係無い」

だからわざわざお前ら一人を我が住処へ招いたんだよ。

「でもそんな簡単に虎杖君が《非觀理論》の使用者だつてバレることは」

「ある。俺たちが証拠だ。コードには使用者を探せるようなものもあるんだよ」

「…………」

鋼冂が押し黙る。先程とは違つて実際にそうだと分かつてしまふからであるつ。

「まあ、俺たちは《非観理論》……虎杖の味方だ。他のコード使用者に好き勝手にはさせない」

「他の使用者を云つて、目的の人物との関係を持たれると困るからですか？」

「まあそういう事。それにお前を助けて損になるような事は無いからな」

俺はそう言い、食器を洗いに行く。

まあ今やらなくてもいいけど、俺が言いたい事は言つたからな。後は本来の親睦を深めることを勝手に三人でしてくれや。

ほら、グダつてきたグダつてきた。

「……………メール？」

食器も全て洗い終わり、三人がボーダゲームやらトランプなどをし  
て鋼皿が大惨敗している様を優雅に眺めていると、ポケットの中  
何かが振動した。

当然、振動したのは携帯なのだが……メールのやり取りをする友達  
を作った覚えがなければ、俺の携帯のアドレスを知っているのは義父  
と千秋と外国に住んでる知り合いの程度だ。

千秋がメールをしてくるわけが無いし、義父が俺にメールをする事  
なんて無いし、外国の知り合いはゴミ屋敷を掃除している時にしば  
らくメールしないという連絡が来たし、迷惑メール対策もしている  
し。

俺の携帯がメールを受信するはずが無いのだ。

一応メールかどうかを確かめる為に、ポケットから携帯を出す。  
確かにメールを受信していた。だが内容は、

『このメールに本文はございません』

何とも奇怪な物だった。

アドレスも俺が知るものでは無いし、タイトルも無い。そして本文  
も無い。

迷惑メールでも無いだろう。ある意味迷惑なんだが。

「おいカス」

「いきなりなんだ、クソ皿」

「これって、貴方のアドレスなの？」

そう言って鋼皿は携帯画面を俺に差し出してきた。

画面に映されていたのは題名も本文も無い、俺に送られてきたのと  
同じアドレスのメール。

「千秋、虎杖。お前らも今メール受信したか？」

確認を取ると、二人とも頷いた。

……という事は考えられるのは二つ。

一つはこの市内の全員に同じメールが行き届いているという可能性。  
一つは俺たちが通う学校の全員にメールが送られた可能性。

一つはコード使用者にのみこのメールが行き届いてる可能性。  
多分、これしか俺たち四人の共通点は無いはずだ。

「……ツ！」

俺が思考に耽つていると、またメールを受信した。

『おめでとうございます！ 貴方は参加者に選ばれました！』

本文に書いてある文章を読んだ瞬間、直感的に俺の中で答えは一つに絞られた。

これはコード使用者にのみ送られてきたメール。

参加者……ということは何か面倒事が起こるってわけか。

そして続けて俺の携帯がメールを受信する。

『ゲームの概要説明 参加者9名のうち一人の勝者を決めるゲームです』

『参加者全員、コード、と呼ばれる不思議な力を持つています』

『参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合つてもらいいます』

『参加者が死亡した場合でも、物が破壊されなければ敗退にはなりません』

『敗退条件は、ものの破壊です』

『敗者は参加者の命、それと同等の物の破壊を禁じます』

『勝者は失つてしまつた大切なものを復元する事が出来ます』

『例えそれが命であつても』

『なお参加者それぞれのコードは』

『《無影無踪》』『《非観理論》』『《否定定義》』『《完全干渉

』』『《干渉不可》』

『《禁思用語》』『《異見互換》』『《結論反転》』『《絶対規律

』』

『となつております』

『ゲーム開始時刻は明日の0：00からで、』『あります』

『くれぐれも殺し合いと勘違いなさらないよ』。これはあくまで壊し合いで

『壊し合いで』

『それでは』『検討を祈ります』

『そのメールを最後に携帯は静かになつた。

しばらく誰も喋らない沈黙が広がる。何が起こっているかを理解する時間である。

パニックを起こして騒ぎ出すか、冷静に判断し落ち着きを掃うつかの二つに別れる時間である。

正直、鋼冚がパニックを起こしてほしい。そうすればいくらでもバカに出来るから。

「一輝、どう思う？」

最初に声を出したのは千秋だった。案外、皆冷静なんだな。

「どうもクソも無いな。まず最初に狙われるのは千秋と虎杖だ」

誰もパニックを起こしそうにないので、パニックになりそうな事を言つてみたが結局誰もパニクらなくて俺は物凄く残念だ。

「『非観理論』を使つたら、何を壊せばいいかバレますもんね」

「こつちには『否定定義』がいるからな。そう言う事だ」

自分が狙われているというのに冷静過ぎる虎杖が少し心配になりながらも、一応答える。

「まあ良かつたのは参加者9名のうち、ここに約半数が集まっていることだ。それだけでも相当有利だ」

「……つまり他の奴らを潰せば後は争う必要は無いくていいわけ？」

口を挟んでくる鋼冚。だがまあ言つてる事は正しい。

「そう言つ事。だけど不用意には動かない方がいい」

「派手に余計に動いたら、他の5人が協力する可能性があるから？」

「ああ。そうすれば不利になるのはこっちだ」

姿を隠すコード。ルールを無効化するコード。全ての事象を観測できるコード。それと千秋のコード。

これだけで他のコード一気に相手するのは無理だ。

「一人ずつ、確実に潰していくってわけね」

鋼仮。何かお前は人を殺すとか潰すとかそういう面では頭が冴えるんだな。

何だ?  
野生の勘つてやつか?

「でも一輝。まだ一つ疑問に残るんだけど」

一分かってる  
賞品のことだろ」

喪失した物の復元。これはH-1で行われたもの。

だが、命まで復元できるのか？ 精神まで復元できるというのか？

人物を復元できる、その辺のコード。

復元  
元に戻す  
壊れる前  
壊れる

また壊す。

壞し過ぎて、物が無くなつて、壞すために直す……元に戻す……復

元する。また壊すために。

ああ、そういう事か。

一 參加者《絶対規律》か

[ 3 ]

俺に咳毛打  
千秋が怪訝そうな顔をして俺を覗き見る

「あひや」  
そんなに心配せずとも、俺は正氣た  
また正氣た  
また墮ちてなし

正二十九

正気だ。正気に決まつてゐる。正気じやなきやいけない。自分が誰で何処に居て如何してゐるかも分かつてゐる。まだ墮ちてない。溺れてない。嵌り込んではいられない。自分がどういう奴だかしつかり分かつて、演じてゐる。

ひやひやひやひやひやハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハツ！』

「一輝？」

だから千秋、心配するなつて。まだ俺は正常だ。ただ嬉しいだけだ。  
嬉しくて嬉しくてうれしくてうれしくてウレシクテウレシク  
テ、

「みいいつけた」  
とてつもなく気分が高揚しているだけなんだ。  
探してた者がやっと見つかって、嬉しいだけなんだ。

1

## s1-o (後書き)

主人公発狂www

いや嬉しいだけらしいんですけど、  
探し物一つ見つかっただけでここまで笑わなくとも、ねえ?  
これでやっとゲームに進めるよ……ハア。

『干渉不可』は築40年以上の、周りの住民からは魔女の館と呼ばれる雑草や木々が生い茂るボロアパートにてメールを受け取った。

「……『無影無踪』？」

連續して送られてくるメールの中で、『干渉不可』の興味を一番惹いたものはそのコード名であった。

(……『無影無踪』って、どういう事？ アイツは確か……)

『干渉不可』は『無影無踪』とは面識がある。あるがしかし。

『干渉不可』が知っている『無影無踪』はもうすでに他界しているはずなのだ。

(アイツが生きてたって事…………？ そうだとしたら…………)

自分がこの手で『無影無踪』の全てをぶち壊してやらなければ。最初の獲物を定めた『干渉不可』は静かに動き出す。

「ゲームだあ…………？」

雑居ビルの2階にある診療所にて『完全干渉』はメールを受けていた。

やつと仕事が終わったというのに、こんじかこんな迷惑メール。連續して送られてくるメールが癪に障り、思わず携帯を折つてやろうかという思考まで行きついていた。

が、ある文面を見てその気持ちは消え去ってしまう。

『勝者は失つてしまつた大切なものを復元する事が出来ます

『例えそれが命であつても』

その文面を見た途端、『完全干渉』の気持ちが大幅に揺れた。

別に何か失つてしまつた物が、どうしても元に戻したいものがあるわけではない。

ただこの一言が《完全干渉》の今までの人生を否定する」ことになっていた。

だから決める。自分がこのゲームに参加することを。

勝者を出させない為に。今までの人生を肯定するためだけに。

『禁思用語』と『結論反転』は同じ場所でこのメールを受信した。

「……ねえ《結論反転》。手を組まない？」

そして『禁思用語』が提案してきたのが協定であった。

「何故？ お前と組んで最後まで残れたとしてもお前との潰し合いだ。意味がない」

「うちのコードは独りきりだと基本的に弱い。この参加者の名の中じゃ最弱を誇つてもいいくらいかも。だけどサポートに回ればま

ま強い」

「……つまり、お前の為に組めと？」

『禁思用語』を睨みつけながら『結論反転』は問う。

「そつちの為でもある。もしも最終的に残れたとしたら、あとは最弱の「コード使用者を潰せばいいだけ。リスクが少ないのでしょう？」

「…………まあ、他の使用者が単独で行動するとは限らないからな。いいだろ？」

そして今、『禁思用語』と『結論反転』のコンビが結成された。

「『勝者は失ってしまった大切なものを復元することができます。例えそれが命であっても』か……」

『絶対規律』は自分の胸に手を当て、メールの文面を音読する。(もしも、これが本当だと呟つのなら……本当だと呟つのなら……)

失ってしまった命さえも元に戻せるというのなら、自分の望む物は一つしかなかった。

自分に一番大切なことを教え、一番大切なものをくれたあの人を生き返らせること。

自分のコードを持つてしても叶えられない儚い望みを叶えられるといつのなら。

『絶対規律』は自ら進んで参加する。

「参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合つてもらいいます」

その文面を見た瞬間、『非観理論』……虎杖紀亜は困惑した。

（僕が命と同じくらいに大切にしているもの……それって何だ？ 何なんだ？）

物心ついた頃には母親は居なく、父親も夜遅くまで働きそのまま今で過ごしてきました。友達と呼べるような関係も作れぬまま今まで過ぎてきました。

家でも外でも独りつきり。そんな自分が命と同等に大切にしている物など思いつきもしなかった。

「どうもクソも無いな。まず最初に狙われるのは千秋と虎杖だ」一輝のその発言で自分が物思いに耽っていたことに気付いた紀亜は取り敢えずその言葉を肯定する。

「『非観理論』を使つたら、何を壊せばいいかバレますもんね」そう自らの「コード『非観理論』を使えば、自分がどんな物を大切にしているかが分かる。

しかし、そうしなければ何を大切にしてるかが分からない自分が居る事がとてもなく嫌だった。

嫌悪感に負け、紀亜は『非観理論』を使用し調べるのを止めた。

(…………ゲームなんて、ふざけてる)

一輝への質問が終わり、鋼冂はそう思った。

正直、命と同じくらいに大切にしているものを壊し合えなんてふざけたゲームに参加はしたくなかった。

そんな事を考えた下郎を引きずり出して、ボコボコにしてやりたかつた。

自ら行つた復讐以上に酷い目に遭わせたかつた。

しかし、

(…………それをするには、わたしもゲームに参加しなきゃいけない……)

そして勝ち残るためには、参加者全員の……虎杖や濁川千秋の大切な物も壊さなければいけない。

どんな理由を並べようと、その行為は絶対に悪だ。そのくらい鋼冂も分かっている。勝ち残るために途中で裏切るしかない。

だから決心する。自分が悪党になつてでも血らがしたい事をするために。

(…………わたしは勝者になつて、皆の壊された大切な物を元に戻して、そして主催者をブツ飛ばすッ！)

「参加者『絶対規律』か…………」

「…………？」

一輝がおかしい。そう千秋は直感的に思つた。

自分がした質問の答えとならない言葉を呴き、その顔は何か不気味な笑いで歪んでいる。

おそらく一輝は何かの答えに辿り着いた上で発言しているはずだ。

『絶対規律』。それが失った物を復元させるコードなのか？  
しかしだとしたら、何故、このゲームに参加している？  
このゲームはそもそも出来レースだつたという事なのだろうか？  
だとしたら何故『絶対規律』はこんな醉狂なゲームをするのだろう  
か？

出来レースならば賞品たて嘘ということになる。たた大切な物の壊し合いの虚しいゲームに変わってしまう。

参加者全員への復讐のため？ それとも「H」使用者への復讐？ どちらも千秋にはしつくりこなかつた。一輝もきっとそうだろう。

何が何なのか千秋の頭が混乱し始めた時。

一輝が堪えきれなかつたように笑い出した。

「一輝？」

思わず、千秋は一輝の名前を呼んでいた。

一輝がそこまで喜びを示すほど、何かに自分は未だ辿り着けないでいる。

どこか自分が一輝に置いて行かれているような気がして、思わず名

前を呼んでしまった。

(いやだ……)

千秋は心の中で否定する。拒絶する。嘆く。求める。

(一輝にまで置いて行かれるのは、いやだ……ッ……！)

## サイド（後書き）

ちょっと色々間違えちゃった。まあいいか

## 序盤戦況

「…………」

目覚めたばかりの頭で携帯の時刻表示を確認する。

現在時刻、8：46。

いつもならとうに学校にいるべき時間だ。

しかし幸いな事に今日は土曜日。俺たちが通つてゐるあの学校は私立校じゃないため、入部もしていない俺がわざわざ土日に行く必要はないのだ。

しかし珍しく体が怠い。頭がまだ全然働いていない気がする。

しばらく天井のシミを数えていると下から香ばしい……いや確実に焦げている臭いが……火事か？

いや、千秋だな。

起動しなかつた脳の活動が急に活発化し、いそいで俺はキッチンへ向かう。

あのダメ人間、まさか料理を作らない俺に対し、料理で故意に火事を起こして殺すなんて暴挙に出たわけじゃないよな！？  
頭の中でいくら否定しても、無意識での殺人という不気味な言葉が浮かんできてる仕方ない。

「千秋、何をした！？」

キッチンに行くと、顔中に煤を付けたエプロン姿の千秋が居た。

「…………ごめんなさい」

千秋は自らの罪状を告げずに、俺に謝罪の言葉を口づけてきた。  
取り敢えず、キッチンに燃え盛る炎は確認できなかつた。  
火は出てない。しかし何かを焦がしたんだろう。まあ、不幸中の幸いかな。

「ハア……取り敢えず、お前は顔洗つて来い」

換気扇のスイッチを入れ、近くの窓を全開にしながら俺は千秋に言う。

前言撤回だ。何が幸いだ。大不幸じゃないか。

よりもよつて俺の秘蔵のDVDをグリルで焼きやがったよ畜生め。そりや焦げる臭いがしても火が出ないわけだ！ だつて溶けてんだもん！

ホントこの尼、どうしてくれよつか！！

「……だ、だつて……一輝が悪いんじやん！」

「アア！？」

このクソ野郎、俺に罪を転嫁しようとしたやがつて。

処刑だ、死刑だ、極刑だ！

「昨日ちいが覗いた時に、そんなものを見る一輝が悪いんだよ！」

「お前に価値が分かる物じやねえーんだよ！」

一体、俺の何が悪いんだ？

自分のパソコンでDVDを見て、何が悪いと言つんだ！？

俺のどこに非がある！？ むしろ勝手に覗いたうえでグリルで焼いたこのバカ野郎に全ての非があるだろ！

ちなみに、俺が見ていたDVDの内容は……パンダが生みたての実の子供を殺したり、親の酷い虐待映像だつたり、まあ大雑把にまとめてしまえば動物の子供が酷い仕打ちにあつてている映像の類を見ていたわけだ。

「あんなものに価値が有るわけが無いじやん！ あんなの見たつて

」

「俺には価値が有るんだよ。お前なら分かるだろ？」

「分かるかあ！」

千秋が怒号を上げて俺の言葉を否定する。

酷いなー、この趣向を分かつてくれると思つたのに。いや、千秋のコードなら分かつてしまつ。

『異見互換』

相手の主觀性や価値観などを解析理解する。また、相手の視界を共

有することが出来るルール。

それが千秋の「コードだ。

つまり相手の考え方や判断基準を理解することが出来る。それをえば、俺の物の価値だつて理解できるのだ。

だがまあ、千秋はこの「コードを大概、覗き見で使つてている。相手の視界を共有することができるルールを使い、俺を何処に居るかを確かめてパシリに使つたり、メールを見たかどうかを確認したうえで俺が無視したらしつこくメールをしてきたり、何か俺をパシリに使いたい時に何をしているかを確かめたり。

まあ、最初に俺が鋼皿と虎杖に接触する前にあいつらの居場所が分かつたのも覗き見のお蔭なんだが。

大体は俺をパシリに使うために乱用されている「コードだ。本当、使いよつてはコード使用者を探せたりするんだが……

使用者が残念なため残念な使い方しかされていない。

「ともかく、俺のDVD焼いた罰として昼食は抜き。決定」

「え、待つてよー！ ちい、そんな事されたら死んじゃう！」

「死ぬほど反省しろとこつ意味だ、理解しろ」

「酷い！ 最低、外道、鬼畜、下衆、悪魔あ！」

「そうだと、お前のお兄ちゃんは最低で外道で鬼畜で下衆で悪魔でサディストだ。よーく覚えとけ」

「うにゃーーー！」

といつわけで昼飯を作らなくてよくなつたので、しばらく俺はソファに座りながらB4ノートに色々と書き綴っていた。

「ちいはお昼御飯が食べたいです。お願ひします、許してください」と言つ言葉をまるまる無視しながら。

ノートに書いている事は、ゲームの事だ。

よく分からぬあのメールから数日。鋼皿と虎杖には無闇にコードを使うなとは言つてある。

『完全干渉』『干渉不可』『禁思用語』『結論反転』『絶対規律』。この五つのコード使用者が動き出すまでこちらは動かない体勢だ。無闇に動き出さなければ、こちらのコードがバレないから。幸い、俺の予想とは違い、この中に使用者を探し出すようなコードは無さそうなのだ。

コードは大体、名前の通りのルールしかない。

『無影無踪』にしても『非観理論』にしても『否定定義』にしても『異見互換』にしても。

名前通りのルールを有している。

だから五つのコードの名前を……まあ全て漢字だからその一字一字の漢字の意味を徹底的に調べ上げた。

その結果、二つを除いた他の三つのコードは安全と判断。

残った二つ……『完全干渉』と『絶対規律』の動向を『非観理論』を使って虎杖に探らせ、その結果を元に五つのコードには使用者を探し出すコードが無いと判断した。

まあ更に、二つには『非観理論』と『異見互換』の二つがある。両方とも情報収集に向いているコードだ。

まあ『非観理論』には観測した事象には干渉できないという規制があるが『否定定義』もこちらにいる為、規制無しで情報も集め放題だ。

となると、やはり問題は……。

「……『非観理論』と『否定定義』か」

問題となるのはこの一人。今は味方であるこの一人。

まあでも、幸いなのはこのゲームが殺し合いではなく壊し合いという事だ。

殺し合いのゲームならばこの一人を終盤まで脱落させてはならない。死んでは困るからだ。

だが壊し合いのゲームなら、敗退したとしても援助を受ける。死なないから。

しかし普通に考えて、自分が勝ち残りたいから命以上に大切にして

る物を壊させてくださいと言われて『はい、どうぞ』と言つ奴なんてこの世にはいない。

つてなると必然的にあの一人とはいすれ対決することになる。

それはできれば避けなければいけない事態だ。あの一人の援助を受けなくともいいくらいに参加者が少ない終盤でなければ対立できまい。

まあ、一人の合意の上で敗退させる手法はあるが……………できればそれは緊急回避の手段として用いたい。

つまり俺がこのゲームの中盤までやらなければいけない事は一つ。一つは、あの一人のどちらかを敗退させること。しかも自らの手を汚さず。

もしも五人の使用者の誰かを利用して敗北させるとしても、こちらが疑われないようにじく自然に立ち振る舞わなければダメだ。

なんとも難易度が高いゲームだこと。

## 意志

「あ、カス」  
「…………チツ」

秘蔵DVDが焼かれた2日後。まあようは月曜日。

昼休み、昼食も食い終わったしちょっと食後の運動として廊下をふらついていたら、鋼皿とエンカウントしてしまった。

よりもよつて「コイツかよ。まだ千秋の方が良かつた。

「カス、今わたしの事を無視しようとしたよな。おい」

「クソ皿、それは大きな勘違いだ。俺はお前を無視よつとしたんじゃない。お前みたいなゴミクズだと思ったんだ」

「カスの皿は節穴ということがよく分かつたわ

「俺の皿が節穴なんじやない。お前のオーラが「ミミ」と同じだけなんだ」

「え？ 何？ 無情に残虐にブチ殺して欲しいって？ 運が良いわね。丁度護身用に改造スタンガンを持ち歩いていたのよ」

「何だよ？ 何ですか？ お前、俺に喧嘩で負けたのもう忘れちゃつたんですか？ もう一度、誰が強いか躾け直して欲しいんですけど？」

「上等だよ、コラ。お前ちょっと屋上来いや」

「オオケー、分かった分かったよ。歳上に対する礼儀と作法をもう一度教えてやる」

と言つ風に喧嘩を売られ、言われるがままに屋上へ来たはいいとして。

鋼皿が居ない。というか予め遅れて来るからと言われてある。  
あの野郎……挑発もほどほどにしないとお兄さんブチ切れちゃうんだよ？

「お待たせ」

ただ変化が無い青空を平然と眺めていたら、鋼冨が片手にビニール袋を引き下げて屋上にやつと来た。

まだ昼食を取つていなかつた、というわけなのだらうか？  
まあ俺のとつちやどうでもいい事だ。

なんて思つてはいるが、鋼冨が袋の中を漁りだし、そこから一つ、おにぎりを俺へ向けて出してきた。

「一つあります？」

「何を企んでるんだ、お前は？」

鋼冨が俺に向けて何かを分け、「えよつとしただけではなく敬語で話しがけて来るなんて。

絶対に何かを企んでいるに違ひない。間違ひない！

「今から真剣な話をしたいのに、罵倒の仕合になつたら会話になりませんもん」

「……なら一つ、貰つておくかな」

差し出されたおにぎりを奪い取り、十秒以内に食べ終えた。  
そのな様子を見る氣も無い鋼冨は、俺におにぎりを取られてすぐにまた袋を漁り、「ロロッケパンを取り出し、食べ始めた。

自分はパンで俺にはおにぎりか。まあどつちでも良かつたんだが。

「それで、真剣な話つてのは？」

「…………ゲームについてですけど、わたしの為にわざと敗退してくください」「…………」

「…………その話、何で千秋や虎杖にする前に俺に言つた？」

返事よりも何よりも、俺はそつちの方が気になつたので鋼冨に聞いてみる。

驚いたのか、少しばかり目を見開きながら鋼冨はパンを口に運ぶ。

「よく分かりましたね。何ですか？」

「千秋はアホだから、何かあればすぐに俺に伝えてくる。だがお前の今のは初耳だ」

ところとは千秋には伝えてない事になる。

そこから先は予測だが、おそらく虎杖に先に伝えるとしたら、鋼  
嵐の中の最低優先度にある俺に話すよりも前に千秋に話をするだ  
ろ。」

しかし千秋に話をしていないという事は、もしかしたら虎杖にもし  
てい可能性が割と高い。

まあ入ってのは無意識に番付通りに動こうとしたりするからな。  
もしかしたら、と思って言つたら当たつていた。たつたそれだけの  
話だ。

「なんやかんやで、わたし達のグループでのリーダー格つて言つた  
ら貴方じゃないですか」

「そうか？ リーダーがいるグループだつたらもうちょっと統率性  
があると思うんだが」

「一番リーダーっぽい人つて意味ですよ。濁川先輩が頼つてるから  
でしきょうけど」

「違うな。きっと俺のカリスマ性が自然と溢れ出ている結果だろ？」

「……………ハア……………」そんなわけで、一番最初に話を付けるべきは貴  
方と思つたわけですよ

「んじゃ、一番最初に聞かれた者ひじく振る舞うナビも。お前は勝  
者になつて何をしたいわけ？」

俺が鋼嵐の瞳をしつかり見て聞くと、鋼嵐は視線をずりすりとなく  
答える。

「こんな最低なゲームを考えたクソ野郎をぶん殴つてブツ飛ばして  
やりたいと思つてます」

「その為に、お前は他の8人の参加者の命と同等に大切にしてる物  
をブチ壊すと？」

「壊した物は、勝者の権限で全部復元させます。これが悪い事だと  
いう事も自覚して、貴方に頼んでるわけです」

「……………お前、大切な物を目の前で壊される痛みを知つてゐるか？  
「知つてますよ。わたし、実は家族を目の前で殺された経験がある  
んです」

「そりゃ……なら、なおさらだ。お前は他の8人にもあの痛みを味あわせる事になるんだぞ？」

「……分かつてます。だからこそ、そんな痛みをこれからも多く生み出す可能性があるものを潰すんです」

「その大義名分のためなら、自分がいかに悪魔や下種や鬼と呼ばれても構ないと？」

「…………その覚悟くらいはあります」

最後の言葉を言い切るまでしつかりと俺の瞳を見続けた鋼仮。ちょっと無駄話をするが、どこかの心理学の本に『異性に嘘を吐くときは、大概の人間が相手の目を見て話をします』なんて物が書いてあつた。

まあそんな余計な知識で、バカが考えたバカなりの誠意を無為にするのは可哀想だろう。

だから俺はしつかりと返事を返してやる。

「断る」

「やつぱりですか……」

予期していたのか、鋼仮のショックはあまり大きくなかった。

「まあそんな強い意志があるなら、誰かに頼み込んで負けて貰うんじゃなくて、無理にでも勝てよ。そうじやなきや、敗者がやりきれないだろ」

「そうですか……そうですよね」

心のどこかでは諦めていたんだろう。どうせ交渉相手が俺だしな。「でもまあ……お前の意志は少しばかり貰つてこぐよ」

「…………えつ？」

「奇遇な事に、俺も目の前で一度ばかり大切な物がブチ壊れたことがあるんでな。こんなクソつまらないゲームを考えるクズ野郎をぶん殴つてブチ飛ばすっていう意志くらいは、共有してやるよ」

そう言いながら、俺は鋼仮に手を振りながら屋上を後にする。

意志（後書き）

ダラダラしてると、展開が。  
つまりん。 まだ おは好きではないぞ。  
俺。

今、俺は無謀な挑戦をしようとしている。

それは『無影無踪』を最大利用した作戦……その名も、NOZOKI。

まあ簡単に言えば、変態行為をするだけなんだけどな。

「で、なんで僕まで呼ばれたんですか？」

「当然、当作戦には『非観理論』の協力が必要だからだよ虎杖君」「いやですよ僕は。鋼凪や千秋先輩とかに殺されるのは」

「鋼凪は大丈夫だ。アイツはコードを無効化できるがコードが使用されてるかどうかまでは分からない」

「でも千秋先輩が」

「そう問題は千秋なんだよ」

千秋のコードは『異見互換』。

視界を共有できる、という厄介なルールがある。

このコードによるバレを防ぐ手段は一つ。『否定定義』による無効化と本人がコードを使用していない時しか思いつかない。

『否定定義』……鋼凪梓美の協力を借りれない今、千秋がコードを使用しないように祈るばかりだ。

「一応、今朝のうちにコードを使用するなとは千秋に言つておいたが……アイツが俺の言いつけを守るとは思えない。この前だつて、勝手に覗かれてDVDを一つ失ったからな」

「そもそも、千秋先輩のコードがあれば覗き放題なんですけどね」「んなもんは分かつてるさ。しかし俺たちでやるしかないだろ?」「すいません一輝先輩。勝手に僕を人数に含めないでください」

「なんだよ虎杖、ノリが悪いな? お前は女の半裸を見たいとは思わないのか?」

「いや、そんな事はないんですけど」

「なら何故!?」

「……正直なことを言いますけど、着替える女子はそこまでエロくないですよ？ 冬場だと特に、体育の授業でもジャージ着たりしますからなおさら」

「…………」

「そんじゃ僕、帰つていいですか？」

「いや、ちょっと待て！ まだだ！」

「いやもう、わざき心の中で僕の言つたこと納得したでしょ？」

「ぐうう…………」

「大体、「コードの乱用するなつて既に言つておいて覗きのためにコード使つたことが知れたら。鍋底に今まで以上に軽蔑されますよ」

「コードは私利私欲のために使うものだ」

「…………輝先輩つて、そこまで変態でしたっけ？」

「んー…………まあ、男はみな狼だからな」

「意味分かりませんよ」

仕方ない、それじゃネタバレするか。

「千秋には、そろそろ仕掛けるからコードを使つな、って言つておいたんだ」

「そろそろ仕掛けるつて……ゲームの事ですか？」

「ああ。まだから『非観理論』と『無影無縫』を無駄に使用して、相手方を誘き出させて貰つ

「だとしても、何故に覗きなんですか？」

「ド派手な事件を起こすよりかはマシだろ？」

「まあ、そうですけど……覗きじゃなくたつていいじゃないですか」

「『無影無縫』と『非観理論』の共通点は、相手に見えないってことだ。そこで問題。男が姿を消せる力を持つたとして大半のド変態は力をどうしようとする？」

「覗きつてことですか…………でも僕、ド変態扱いられるのが非常にムカつくんですけど」

「まあド変態とかは置いといて、正直な所、相手に俺を『非観理論』の使用者だと思わせたいんだよ」

虎杖が怪訝そうな表情をしたので、追加で説明する。

「俺の『非観理論』の使用者だと勘違いしてくれれば、その『コード

使用者は無駄足しか踏めない」

「『無影無踪』で命より大切な物を隠されてしまつてるから?」「

「そういうことだ。俺を殺そうとしてもそう簡単に殺されないからな。時間が稼げる」

「でも『非観理論』なら、どんな奴からでも簡単に逃げ出せると思ふんですけど」

確かに『非観理論』は、全ての者に観測されないと云うルールもある。

しかしどが『非観理論』を捕まえる方法などいくらでもある。

「お前はあくまで観測されないだけで、その場から消え去つたわけじゃない」

「そうですが、どうしてひしろ認識されなきゃ捕まらないじゃないですか」

「それじゃ考へが甘いって言つてるんだよ。実際に証明してやる、ちょっと来い」

不服そうな顔をしながら虎杖は俺の後に付いて來た。

計画通りッ！

「いやまさか、一輝先輩の口車に乗せられて加担するとは思つませんでした」

「口先の魔術師になれるとは思わないか?」

「同じイニシャルだからってあまり調子に乗らないでください」

虎杖は無表情ではあるが声に怒りが含まれる。  
まあまあ、保健室だから良いじゃないか。

しかし、まさか今日という日に検診があるとは。なんたる偶然。ご

都合主義。

「あ、入つてきましたよ

おつおう良い眺めじや良い眺めじや……ん?

ぞろぞろと保健室に入つてくる女子たちの中に、鋼冫と千秋を発見。あ、やばい実験中止だ。バレる可能性が高いとかそういうのじゃない。死ぬ。

しかし、俺は《無影無踪》で姿を消している。虎杖に脱出の合図を送りたくとも送れない。

さて……どうする? 虎杖を置いて俺だけ脱出するか? いや、そんな外道なことは……。

「……一輝?」

千秋に名前を呼ばれた瞬间、背筋がゾクツとなつた。というか死亡フラグだ。回避不可能な死亡フラグだ。

「どうしたんですか濁川先輩?」

すぐさま鋼冫が千秋に問う。つていうか問うな! やめろ、俺をそこまで殺したいか!?

「ん~……何でも無い。気のせいだと思つ」

まさかのフラグ回避! ? いや、千秋のバカさ加減に感謝する日が来るなんて。

「はい、それじゃあ上脱いでね~」

保険女医がそんな指示を出す。俺は鼻を押さえる。

いや、ただ千秋の無駄に豊かに育つた爆弾の対策だ。千秋といふことを忘れれば意識と血液を持つてかれちまう。

覗き（後書き）

タイトルからして、**酷い。**  
いや俺酷い。凄く酷い。発想が酷い。全て酷い。人格が**酷い。**

## 直前回避

引き続き、保健室にて。

出血はせず、どうにか一人とも生き残っている。

しかしそろそろ外に出なければ、鼻から出血されてしまう。

それにして虎杖の奴、一切表情は変えずに鼻だけ押さえて……ムツツリが。

「ムツツリとかそういうのどうでもいいでしょ」

まあそうだけども、何の覗きをしてるのに表情を変えないのは不気味だぞ？

「覗きをしたくてしてるわけじゃないんで」

だつたら部屋を出でけよ。このムツツリスケベ。

「一輝先輩、マジで一発殴らせてもらつてもいいですか？」

……なんて、何故か俺は一言も発せずに、虎杖との会話が成立してしまった。

それ程に、覗きという文化は男子にとっては共通語なのかもしれない！

しかしそれにしたって、千秋のが目にちらついて仕方が無い。

意識はしないようにしているんだが…………クソ、アイツいつからあんなに大きくなつてたんだ？

「あ、次は千秋先輩の番ですね」

……ちょっとついて行くか。

「行くつて…………こきなりどうしたんですか？」

お前、少し女子の胸やら脚やらを見た瞬間は興奮したけど、もうそろ飽き始めただろ？

だから少し気晴らし程度に動こうじゃないか。

「…………まあ、どんな理由であれ、ここから動けるのは幸いですね」というわけで千秋のあとをテクテクとついて行く男子一囃。

よくよく思つたら、ひとつ隠れることなく見ているんだよな俺た

ち。

「コード」というのは全くもって便利なものだ。

「……一輝先輩、あれって」

そして千秋の後について行つた結果、俺たちが目撃したのは……検診で来た医師が、男だということ。

。

このクソ野郎がああああああああああああああああああああああああ

俺たちのように「コード」を使わずとも覗き放題だということのか！ええ！？

こんな覗きの方法……おかしいだらうが…………ツー

こんな方法……卑怯だらうがあ！

あの男医師、今すぐにブツ飛ばしてやる……

「一輝先輩、落ち着いてくださいー」

冷ややかな声で虎杖から抑止される。

お前は……許せるというのか!? この男医師を!

俺たちのようになんかと覗き見るのはなく、堂々と女の半裸を見れるこの男を！

「いや僕たちも割と堂々と覗いてますよ？ 普通なら犯罪ものを堂々とやつてのけてますよ？」

んな事はどうでもいいんだよ！ 感情論、気持ちの問題なんだよ！

「バカは黙つて覗いておけばいいんですよ」

それでも俺はあの男医師が許せない…………ツー

しかし無駄に自分の姿を晒そものならすぐに教育指導になつてしまふ現状なので、虎杖の言葉に従つて俺は戻つて女の半裸を舐め回すように覗まくつていた。しかし普通おかしいだろ。

こういう女子の検診の時は、大概女医がやるものじゃないのか？まあ俺は、女子じゃないから分からなが。普通に考えて男医師に診てもらうよりも女医に診てもらつた方が同性として安全するんじやないだろ？

最近はちょっとしたことでセクハラになるような世の中だ。

こういうのも、ここにいる生徒の誰か一人が親に言つて、そして親が学校側に文句を言う可能性だつてある。

だからこうのは普通、俺の考え方だと、女医がやるといふのにあの男医師は！

野郎……思い出しだけでムカついてきた。やつぱ一発ぶん殴つてやろうか？

大体、今日の検診だつてなんでこんな冬場にやるのかつて話だ。そもそも何の検診なんだよ？ 千秋がどこか不健康だつていう話は聞いたことがないぞ。

いいや、そもそも最近は俺がアイツの生活を管理してやつてるから不健康かどうかは医者よりも俺の方が分かると思つ。そして俺の見立てじや、千秋はどこも不健康じやないとと思つ。

なのになんで検診？ 健康検査で一度引っ掛けないと検診にはならない。

確かに春頃に、少し体調を崩してて検診に引っ掛けたというのなら納得いくが。

何故、春に行われた検査の再診が、秋の暮れなんだ？

偶然？ ご都合主義？

それは本当に、俺に合した都合だつたのか？ 俺に合した偶然だつたのか？

いやそもそも誰かが何かに合わせたんじゃないのか？

例えば……そう。

鋼屁梓美と濁川千秋の両名はコード使用者であるゲームの参加者だ。

そのゲームが開始されたのはつい最近。

ゲームでは使用者の命と同じくらいに大事な物を壊し合つといふものだ。

だからこそ使用者の両名は常にその大事な物を持ち歩いていはねばだ。

そこで例えばこんな検診中。教室にその大事な物を置いておけるだらうつか？

学校の治安とかは関係無しに、誰かに盗まれる可能性がある。さらには盗まれたりした時にいつかりとした事で壊されてしまう可能性も無くも無い。

だから、検診中であれ大事な物は持ち歩く。まあそれが普通だ。  
そして次に、男医師についてだ。

俺の常識から言って、こういう女子の検診は男医師ではなく女医がやるものだ。

なのに男医師というのは少し学校側にとつてもリスクを生じる部分がある。

だがしかし、世の中には学校側にそのリスクを忘れさせる方法がある。

いいや、その方法を使えば無理にあるはずのない検診をでっち上げる事も可能だ。

その方法の名を…………俺たちはコードと呼ぶ。

「ツー！」

「きやつー？」

覗きによつて心が通い合つた虎杖が、千秋を無理矢理その場から突き飛ばす。

俺は姿を晒し、保健室のドアを《無影無踪》によつて消し去る。  
さあて、こつちが仕掛ける前に相手方が接触してきやがつた。壊し合いで開始だ。

## 直前回避（後書き）

……あるえ？

おかしいな、つこさつきまで覗きをしてたスケベな話だったのに。  
何があったんだろう？

## 作戦会議

姿を晒すと言つても、そんないつまでも晒していたら「わやー、覗き魔！」と善からぬ称号を貰つてしまつ。

そんな称号は貰いたくないので、一瞬でドアに触れ、そして自分の姿と保健室のドアを消した。

そしてそのまま敵前逃亡！　だつて、一瞬であれバレたら逃げるが覗き魔の常識だから！

「……あの力入野郎！」

俺の姿を一瞬捉えてしまつた鋼屈は、追う様に保健室を出る。虎杖も《非覗理論》で隠れたまま、保健室を出る。

「待つて、梓美ちゃん！」

千秋は多分、冷静に状況を把握し、いきなり出て行つた鋼屈を追う様に、自然と保健室を出る。

これで、全員逃亡は成功だ。

次に考へるべきは、相手のコード。

学校側の人間に無理に検診を設けさせ、さらには女医ではなく自分を推薦させるようなコード。

簡単にまとめれば相手の思考を捻じ曲げるコード。

九つのコードの内、そう言つたことができるものは《完全干渉》《絶対規律》《結論反転》の三つ。

……と言つても俺が勝手に予測したルールでの判断だが。

まあ後で虎杖に《非覗理論》を使って調べさせねばいいことだ。ということは、四人で一度合流しなければいけなくなるか。

保健室から一定距離以上を離れたので、立ち止まり、姿を現す。ポケットから携帯を取り出した直後、誰からか着信する。と言つても誰だかは分かつている。千秋からの電話だ。

「千秋、無事か？」

『一輝こそ、敵に捕まつてない？』

「敵に捕まる前に、教師や鋼凪に捕まりそうだ」

『これにこりたら「コードを乱用して覗きなんてしない」と。分かつた?』

「お前に、お前の「コードだけには言われたくない」

『まあ、確かにね』

「特別教室棟の2階と3階の間にある踊り場。他の一人にメールで伝えておいてくれ」

『分かった』

千秋がそう言つと同時に電話を切る。

まだ一番最後に出たはずの千秋が捕まつてないとなると、まだ相手は動き出していくのか。

一応、医師と来たから仕事は最後まで責任もつてやるつもりとかか?つまりそれは最後まで他の女子の半裸を見続けるつてことかこん畜生絶対にぶん殴つてやる。

息継ぎせずに男医師(仮名)への怨念を再確認しながら、俺は自らが指定した集合場所へ向かう。

### 「覗き魔」

鋼凪は集合場所についた瞬間に、それより前に来ていた虎杖と俺に向かつてそう言った。

「いや僕は一輝先輩に無理矢理連れて行かれただけで」

「そうだぞ。虎杖は女子の半裸を見たつて表情一つ変えないムツリスケベなんだ、責めるなよ」

「一輝先輩一発ぶん殴つてもよろしいでしょ?」

鋼凪がジト目で虎杖を見るからつて、俺に八つ当たりすんなよ。

「変態、最低」

鋼凪は最後にそう言い、それ以降口を閉じてひたすら男一人を睨み続けていた。

「ちい……私が最後かな?」

「ああ。そうだ」

千秋の到着と同時に、作戦会議に移る。

「虎杖、鋼凪は《非観理論》での医師が誰だか調べてくれ」

「分かりました」

鋼凪は返事をせず、虎杖だけが返していく。まあ実質、調べるのは虎杖だけだからな。

「千秋はコードを使つな」

「何で？」

「俺の予測だと敵は《完全干渉》《結論反転》《絶対規律》の三つのうちのどれかだ。《完全干渉》だった場合、逆算されてお前のコードがバレるかもしない」

「分かつたけど……私に何かできることがある?」

「《完全干渉》じゃなきや、有るんだが」

「残念ながらその《完全干渉》があの男医師の「コードみたいですよ」と調べ終わった虎杖が、そう答える。

《否定定義》によつて《非観理論》の規制が解けたからなんだが……」の連携は痛手になるかもな。

「なら今回は《無影無踪》《非観理論》《否定定義》の三人でいく。千秋は……まあ、お留守番でもしてろ」

「一輝、言い方が酷い……」

まあでも仕方が無いだろ。今回のスタメンではないんだから。さて、スタメンのスタメンによるスタメンのための戦略を立てようではないか。

「鋼凪、《完全干渉》のルールについて教えてくれ」

《否定定義》と《非観理論》は過去に《完全干渉》と対峙したことがある。

……と言つても、あの男医師と対峙したわけではないんだが。取り敢えず、誰が使おうとも《完全干渉》は変わらない。

「……自分を中心とした半径20メートルの範囲を5分間、干渉できるつてルールよ」

「他に特典は？『非観理論』みたいな規制とかそんな感じの」「特には。ただ『非観理論』の他者から観測されないってルールが通じるから……多分、カスの『無影無踪』によつて消し隠れるルールも通じるとは思つ」

「そうか、それは朗報だな」

「でもわたしと虎杖君の二人だけで十分よ。一度『完全干涉』を漬けたことがあるから」「いやでも

「確かに、虎杖君は覗きをした。でも本人の主張だとカスに嵌められたからだと言つてるの。それに間違いはない？」

「ええ、まあ」

「そう。じゃあ覗きの主犯格であるカス野郎はここで地に這いつくばるよつて土下座しながら反省してなさい。濁川先輩、監視お願ひします」

「うん、任せておいて」

「それじゃ、行つてきます」

「行つてきます」

「行つてらっしゃーい」

えつ？

え、何？何が今この場で起つたの？

もしかして俺、鋼仮に言いくるめられて、置いて行かれた！？

「一輝」

俺の肩に手を置いた千秋は一瞬。

「土下座」

つまり本当に俺は鋼仮のようなバカに言いくるめられて、義妹の前で土下座をしなければならないピンチに陥つたということか。いやまあ、悪いのは全部俺だから仕方が無い様な気もするんだけどね。

## 作戦会議（後書き）

まあ、覗きは犯罪ですもんね。  
コードとかいう異能とか関係無しに上下座するべきですよね。  
主人公とか関係無しに。

## 説明不足

『完全干渉』……………春永冰雨<sup>はるながひさめ</sup>は、未だ保健室にて検診を続けていた。

本来なら、『異見互換』もしくは『否定定義』を捕え、命と同等に大切にしている物を破壊しているはずだつた。

しかしそれよりか前に、『無影無踪』と『非観理論』が動き出してしまつたため計画は中断。

彼らが保健室を出た時、無理に追いかけることはできかた、それをすれば冰雨の大切な誇りを穢してしまつため、仕方なく検診を続けていた。

保健室にいた女子生徒も女医も『完全干渉』によつて記憶を改竄され、四人……正確には、姿を現した三人が保健室に居たことを忘れてしまつてゐる。

無駄に騒がれても困るのは冰雨自身だからだ。

四人に脱出されてしまつた今、冰雨の最速で最適な行動は、検診を終えて四人を追うこと、である。

機械的に女子生徒を診ながら、少しばかり冰雨は後悔していた。

検診に来た医師、という設定でなければ冰雨はすぐに彼らを追つことができた。

しかし医師といつ設定が、今冰雨をこゝにして保健室に縛り付けていられる。

最後の女子生徒を診終わると同時に、冰雨は『完全干渉』によつてまた記憶を改竄し、すぐさまに保健室を出る。

『完全干渉』のデフォルトでの干渉範囲は20メートル。

おそらく彼ら四人全員がそれよりも離れた場所に移動したはずだ。しかも『完全干渉』のデフォルトでの干渉時間は5分。

冰雨のコードは最大5分しか使えず、しかもコードの使用を止めたからといってまた5分使えるわけではない。

氷雨本人にもいつコードの制限がリセットされるのかはイマイチ分からぬが、夜寝て朝起きたリセットされていた。

睡眠を取ればリセットされるのか、それとも24時間でリセットされるのか。

それは分らないが、取り敢えず今は関係の無い話だ。

ともかく《完全干渉》を無闇に多大に使用することはできない。記憶の改竄も一瞬でやってのけたことだ。もう一度と使いたくはない。

いや、無闇に多大に使用する必要は無さそうだ。

二人が……《非観理論》と《否定定義》の一人がわざわざ自分の元に来たのだから。

～～～時間は少し前に遡り～～～

「あれ？ 一輝、土下座しないの？」

「するか、するわけないだろ」「

踊り場に残された俺と千秋。まあくだらない雑談をするしかないわけですよ。

「つていうか一輝、どこ行こうとしてるの？」

「戦の地だよ」

「二人の後を追うつてこと？ 確かにちょっと心配だけど

「心配の域を超している。危険だ」

俺は断言する。断言するに足りる根拠もある。

「《完全干渉》は俺たち四人のコードをもうすでに知ってるはずだ」

「……知つていてるからこそ、ちいと梓美ちゃんを狙つたの？」

「鋼皿はコードが発動されることに気付かなければ《否定定義》を使わない。千秋の《異見互換》は攻撃性が一切ないコードだ。《無影無踪》で隠れられたり《非観理論》で予知されて逃げられるよ

りか、全然捕え易い」

もしも俺と千秋、鋼屈と虎杖の「コード」が逆だったら、女子ではなく男子の検診になつてただろう。

あくまで俺の予測ではあるが。

「でも、今は梓美ちゃんだつて警戒してるわけだから《否定定義》も使える。さつきよりか安全だと思つよ」

「どうだか」

千秋の言つた言葉は半分正しい。でも半分は間違つてる。

「さつきまでは気付かれずにコードを発動して一人を捕えなきやいけなかつたが、今は違う。ド派手にコードを使つてくる。《完全干渉》は時間制限のあるコードだ、ド派手にコードを使った方がやり易いに決まつてる」

「でも二人は、一度《完全干渉》を倒したことがあるんだよ?」

「それが油断に繋がる」

とこゝが、多分もう鋼屈と虎杖は油断している。

さつきの《完全干渉》の説明の時に、言い忘れた事が多分あるからだ。

「《完全干渉》は自分を中心とした半径20メートルの範囲を5分間、干渉できるつてルール。それは分かつた。だけどその干渉範囲は常にそつなの? 干渉時間は常に5分なの?」

「……あ」

そんな事は鋼屈は言つていなかつた。俺にそんなことは説明しなかつた。

まあ、元々俺を戦いに参加させる気が無かつたからかもしれないが。「多分、鋼屈はそれぞれ最大範囲、最少時間で答えたんだと思つが……そこら辺が油断の元だ」

「なんで?」

「その情報は《非観理論》で調べた信憑性が高い情報ではない可能性がある」

「……? どうしてそう思うの?」

首を傾げながら千秋が問うてくる。

「俺が鋼凪に『完全干渉』のルールについて聞いた時、鋼凪は一切虎杖に確認を得なかつた」

「それは、梓美ちゃんが『完全干渉』のことを虎杖君より知つてゐるからじや？」

「虎杖より詳しいわけないだろ。『非観理論』は全ての事象を観測できる、言つてしまえば辞書のようなものなんだから」

辞書よりも、ネットよりも、パソコンよりも、人間の脳が記憶という概念で勝るわけがない。

「鋼凪は虎杖に一度も確認を得なかつた。そして虎杖は一度も説明の時に口を挟まなかつた。だからもしかしたら……『非観理論』で『完全干渉』のルールを調べてないかもしない」

「それって…………考え方によつてはピンチじや」

「ピンチかもじやなくて、ピンチなんだよ」

鋼凪は最大干渉範囲が20メートルだと思つてゐる。

しかし、もしかしたら、場合によつては、その情報は偽である可能性がある。

いや、偽であろうが真であろうが、このままだと鋼凪たちは負ける。

「千秋、あの二人は今どこにいる？」

「…………保健室近くの廊下…………もう『完全干渉』と対峙しちゃつてる」

もう対峙しちゃつてる、か。

……チャンス、良い機会かもしれない。

『非観理論』も『否定定義』もいざれ敵に回つてしまつ『コード』だ。

もしここで『完全干渉』によつて大切な物を壊され、敗退してしまつたとしても、殺されない限りは一人の協力を後々も得られる。つまりここは、序盤戦の山場かもしれない。案外早いものだ。

この戦いで、最低限一人の『コード』使用者が敗退する。

未確定のこの結果を確定させるには、俺の援助は少し遅らさせなければいけないかもしれない。

考えがまとまると共に、俺の進路を邪魔するものを『無影無踪』で

消し去り始める。

## 説明不足（後書き）

最低ですよねこの主人公。ホントマジ最低。  
クソつてくらい最低、外道、下種のカス主人公ですよね。

## 対戦

「虎杖君、事前に確認しておくけど……《完全干渉》の大事な物つて何？」

「……免許証、紙の医師免許証だ」

「何でそんな物が？」

「大切な物なんて人それぞれだろ」

そんな話をしているうちに、僕と鋼凪は《完全干渉》の前に着く。

「……そっちから来るとは、楽で助かる」

そう言うと共に、男医師は片腕を振るう。

それに伴って、無数の氷の針（？）のようなものが現れ、こちらに向かって猛スピードで……ってヤバッ！

鋼凪も僕も、頭を抱えながらしゃがみ込み、どうにか氷の針をかわす。

「鋼凪！ 何でコードを使わなかつたのさ！？」

「何を否定したらいいか分かんなかつたのよ！」

そうだった、鋼凪はそこまで頭の回転が速いわけじゃないんだつた。それに僕も何を否定したらいいか分からぬ程、テンパっていた。奇襲なんてされるとは思つてなかつたから。

これは自分の考えの甘さのせいだな。

「虎杖君、わたしがアイツに突つ込むからサポートよろしく」

「……鋼凪、分かつてるのは思つけどこの前の《完全干渉》とは違つて……」

「分かつてる。殺す部分を身包み引っ張りながら免許証を取るつていふ風に変えればいいんでしょ？」

ダメだ、鋼凪は力押しでこの勝負を終わらせる氣だ。違いを少ししか分かつてない。

しゃがんでいた姿勢からクラウチングスタートのように突撃する鋼凪。

干渉範囲である20メートル圏内に入つて2秒後。

「1秒後、両側から氷の壁で押し潰される」

「否定」

鋼凧の声と共に、微かに集まり始めていた水蒸気が元の場所へ霧散する。

「1秒後、左膝を狙つて氷柱が地面から突起する」

「否定」

直後、床に凍りそこねた水蒸気が水分となつて水溜りをつくりだす。「2秒後、右肩、左胸、腹部、左脛、右踝を狙つての氷柱と天井が崩落」

「全否定」

水蒸気は元の居場所へ戻り、崩れかけた天井は普段通りのヒビが入つていらない状態へ戻つた。

これが鋼凧と僕の作戦。

『否定定義』はコードなどを無効化するという強力なものが、鋼凧自体は、駆け引きや相手の行動を読むことを苦手としている。得意なものは『否定定義』を使った力押し。「ゴリ押し。猪突猛進。だがまあ、そんなことをすれば半径20メートル以内を自由に干渉できる『完全干渉』にあつさりとやられてしまう。

それを避けるため僕は『非観理論』を使って、『完全干渉』が鋼凧に仕掛ける攻撃を全て先読みし彼女にそれを口頭で伝える。その攻撃を鋼凧はただ否定するだけ。それだけでコードを使った攻撃全てが無効化される。

ある意味凄く恐ろしい。相手の策略や思惑を全て跳ね飛ばし、相手の元へ辿り着いて止めを刺せるのだから。

この鋼凧の猛進を止める術はただ一つ。僕を口を塞ぐ…… ようは僕を潰してしまえばいいのだ。

しかしそれも叶わない。

何故なら『非観理論』には他者から観測されないというルールがあるのだから。

観測できなければ、干渉できない。つまり『完全干渉』は僕個人に攻撃をするどころか、僕がどこに居るかも分からぬ。

僕が干渉範囲である20メートルに入つても気付かれることはない。だから鋼屈への僕の予知が途切れることはない。

この作戦、僕もちょっと走らなきゃいけなくて疲れるけど、確実に『完全干渉』を倒せる。

鋼屈の猛進を止める術はもう無い。

氷雨はなおも鋼屈へ攻撃を仕掛けながら、冷静に状況を分析していった。

こちらの攻撃はどんな死角や大量に同時に仕掛けても全て無効化されてしまう。

先程から氷雨には鋼屈の「否定」という言葉しか聞こえないが、それは多分、観測されないルールを使用されているからだ。

つまり正確にいえば、こちらのどんな攻撃も全て予知され、全て無効化されていくというわけだ。

まったく小賢しい……。

氷雨は苛立ちと忌々しさを感じて少し嘆息を吐く。

鋼屈の聴覚に干渉し、虎杖の声を聞けなくしてしまおうか。

……ダメだ。聞こえなくなつた瞬間にすぐさま無効化されてしまつ。

鋼屈の周りの音に干渉することも無駄な足掻きだ。

虎杖本人に攻撃を仕掛ける事すらできれば、鋼屈を討ち取ることなど容易いのだが……。

本人を観測できなければ、干渉する事も叶わない。

……いや、一つだけ虎杖に干渉する方法がある。

虎杖個人を干渉することが不可能ならば、全てを同時に干渉すればいいだけだ。

「……？」

鋼凪に対する攻撃が途絶えた。

諦めた……いや、そんな簡単に諦めるわけがない。

……もしかして逃走経路を確保しようとしているのか？

そう思い、僕はすぐさま《非観理論》を使って相手の行動を未来予知をする。

それを行つた事は間違いでは無かつた。でもタイミング的には遅かつた。

「虎杖君……？」

指示が途絶えたことによりて、鋼凪がこちらを向いて僕の姿を確認しようとする。

それと同時に、《完全干渉》が片足で思いつきり床を踏む。  
「鋼凪！ アイツ、干渉範囲全体に氷柱で攻撃してくる！」

## 対戦（後書き）

氷雨の考えを補足すると「取り敢えず全部攻撃すれば、当たるだろう」とことです。

言い換えるなら、下手な鉄砲数撃ちや当たる。周りに迷惑が掛かりますので、皆さんは真似しない様にしてください。

敗退

一ツ否定！」

僕の声と『完全干渉』の全域攻撃はほぼ同時だった

それでも僕たちに攻撃が届くよりも鋼盾のほぼ反射的に

力押しの達人だけはある。僕なら絶対反応できなかつた。  
しかし油断するのはまだ早かつた。

一か心解れたら  
《非觀理譜》

『完全干渉』のその一言で、僕は自分の過ちは気付く  
僕は元々がら空きだ。何故ならそれは他者から観測されないルール  
を発動しているから。

それ以上干渉せられない。だからその言葉は僕がからぬさないといふ事を示しているのではない。

示してるのは、僕の指示が、かぶ空きたらしい事だ。

上手い表現が思いつかない。  
なんと言えばいいのだろう?

水の矢のよがなもので両足の肉を噛み潰された鉤爪は悲鳴を上げながらその場で倒れ、仰向けになつて足を押さえる。

「あツツツツツツー！」

悲鳴にならない、まさしく絶叫を上げる鋼屈。

もう『否定定義』も機能していない。それは多分、彼女の脳が激痛の処理で埋め尽くされてしまつたからだろう。

確信はある

僕が誤って『非観理論』を使って鋼镚の未来を予知してしまったから

もしも《否定定義》が機能していれば、まだ僕は《完全干渉》を止める事が出来た。

でも出来ない。機能していない。故に僕は、言動も行動も禁止された……ただの傍観者となることしかできない。

今考えれば、全て僕の油断が悪い。

僕が全域攻撃を予知することも、それを鋼冴によって無効化されることも《完全干渉》には分かつていたはずだ。

《完全干渉》が狙つたのは、僕の油断。そして鋼冴梓美。始めから僕に攻撃を加える気なんて無くて、僕の指示が途絶えることを狙つていたんだ。

「さて」

《完全干渉》……春永氷雨が、空間に干渉し、一瞬で鋼冴の前に移動する。

脚の傷口を踏みながら、氷雨は言葉を続ける。

「まずは《否定定義》が大切にしている物から丁重にぶつ壊させてもらいますか。あー、安心しろ。疵の痛みでろくに喋れないお前に問い合わせしたりはしない。お前の脳味噌に聞くとするよ」

言葉の終わりと共に、氷雨は鋼冴の頭蓋を驚撃みにして《完全干渉》を発動。

脳細胞の記憶領域に干渉し、彼女の記憶の中から大切な思い出を調べ漁つていく。

その思い出の中で一番印象に残っている物が今何処にあるかを脳内検索する。

そういつた虱潰しの方法を5秒続けたところで、氷雨は呟く。

「制服の、ポケットの中ねえ……」

鋼冴の体に手を伸ばし、制服のポケットの中を漁る。

そうして出できたのは、四葉のクローバーのヘヤピン。それが鋼冴が自分の命と同等なくらい大切にしている物。

「死んだ家族との思い出の品か。命と同じくらい大切な思い出の塊……壊したくは無いねえ」

氷雨はそう言うが、本心から出た言葉ではない。だからといって全てが嘘のわけではない。

少し……心の片隅程度にせんのよつて思つてこる。だがあくまで心の片隅。

二

どうでもいいようなことなのだ、氷雨にとつては。

『非観理論』を使えば全てが観測できる。

激痛で言葉が続かないが、どうの野口さんか。

卷之三

掌一回り、力が入りこむ。手の裏側を弄りながら、未だ仕事に思っていなかった。

これが「起」である。金匱の「ハヤビ」の運喩

全てが分かる  
全てを観測できる  
たか今はこんな異能は必要なし

持つて必要ない。

今こつして痛みに苦しんでる鋼皿を、大切な思い出を壊されよつと  
つて、ぬ鋼皿を教えるも「なーーい」は異能な「のはー」。

なのに、僕の願いは神様どころか悪魔さえも無視をする。

大切な物が壊される瞬間たゞぐ見ておけよお嬢ちゃん」

କୁଳାଳ

正  
確には目を瞑る。

いかにも鋼凧らしい行動だ。

「それが、見るのよ兼か  
じやあ

鋼凧の顔の近く……耳の近くにしゃがみ入

「よく耳に焼き付けて……そうだな、音だけでその光景をイメー

“我國人民的民主權利，是中國人民民主專政的國家制度所保證的。

簡単な方法だ。脳細胞の一部を組み換え、その音とイメージした光景を比ぬまじき覺え付けるよう二疋意をせらる「ナド」である。

景を列ぬまで焼き付にゐるに記憶せんだけである

「それじゃ、これでお前はゲーム最初の敗北者だ」「やあああああああああああああああつ！！！」

——やああああああああああああああああ——！」

その言葉に伴い、ヘヤピンを綺麗に真つ一につぶ折る。

ただ折つただけではない。鋼皿の本当に最後の足搔きである絶叫を含めた余計な雑音をキャンセリングして、その音だけを聴覚に聞きとらせた。

そうして最新のヘッドホンよりもクリアな音を聞いた鋼皿は何を想像したのか。

それは何かの画像に映された、幼い時に両親と過ごした記憶が、画面ごとに一つ一つに割れ、崩れ去るというものだった。

## 敗退（後書き）

何か鬱つぽいような感じだった気がしなくもないんだけど。  
いやまあ、全然こんなのは鬱じゃないよね。そうだよね。  
こんなので鬱つぽいなんて言つたら、誰かに怒られちゃうよね。

『完全干渉』により『否定定義』が敗退。彼女がこのゲーム初の敗者になつた。

……想定通り、計画通り、全て俺の思惑通りに動いている。これによつて高リスクだつた『否定定義』と『非観理論』の片方は敗退。それも敵によつて。

それはつまりこれからも鋼冂の協力が得られるということ。例え俺が鋼冂からしてみれば外道なことをやつたとしても、アイツが俺を敗退させることはゲーム上叶わなくなつた。

このまま虎杖も敗退させたいが、まあ、限度つてものは大事だよな。ボーナスを狙うんだとしても優先順位は『完全干渉』だ。

アイツは虎杖を敗退させた後、俺たちも狙いにくるはずだ。それはとてもリスクが高い。

俺がこのゲームで残るためには優先的に潰さなきやいけない相手だ。さて、息巻いて勝手に戦いに行つた二人組を救つてあげましょうか。まずは散々悲鳴を上げたり、絶叫したりして泣き疲れて死んだ目をしている鋼冂から。

「 ッ！」

俺が指を弾くと、天井が消え、『完全干渉』の上に大量に色々な物が降つてくる。

まあ、『完全干渉』はさぞ驚くだろう。

自分を中心とした半径20メートルが干渉範囲ということは、つまりは天井のさらに上、次の階の床まで干渉できる。

それなのに、今の今まで無かつたはずの物が大量に自分の元に落ちて来るんだから。

つまりそれは今まで処理してこなかつたもの。

ほんの一瞬だけ、『完全干渉』は処理負荷によつて反応が遅れるはずだ。

まあ処理負荷が掛からなくても、奇襲に對しては人間誰しも驚き反応が遅れてしまうものだ。

その一瞬の隙を狙つて俺は姿を現し、鋼冴に触れる。

今までに一度でも鋼冴の体に触れた事ががあれば（救う氣はないけど）一応救えたのだが、残念ながらこれが初タッチである。

これによつて、鋼冴は《無影無踪》によつて隠せる物の対象となつた。

《無影無踪》によつて姿を消し隠されたものには干渉できない。それも証明済みだ。

鋼冴と共にコードと共に姿を消し、俺はその場から逃げ出す。順当な判断だ。鋼冴を今この場で回収するのはリスクが高いし、わざわざ鋼冴たちが《完全干渉》の相手をしていふつむに罠を仕掛けたんだ。

そこまで誘導してやらないと、敗退した鋼冴も密かに努力した俺も報われない。

取り敢えず、一度虎杖と合流しておきたい。

まあ千秋に先程、俺のメールを転送してもらつたから……まあ虎杖の精神が少しでも正気を保つていたら指定した場所に来るはずだ。取り敢えずそこまでダッシュだ。ダッシュ、ダッシュ、ダッシュ！

「よつ虎杖。氣分はどうだ？」

「…………あまり良くないです」

俺が集合場所、特別教室棟3階の一室に来た時にはもうすでに虎杖が居た。

「鋼冴は？」

「さつきの場所だ。俺のコードで隠してあるから《完全干渉》に何かされる恐れもない」

「…………何か策はあるんですか？ 僕の予知は使えないし」

「使う必要なんかない。これ以上長引かせるつもりもない。一瞬だ。」

一瞬で《完全干渉》を片付ける

「片付けるつて……こつちはもう一人とも隠れる事しか出来ないんですよ」

「充分なんだよ。《完全干渉》『』とき、それだけで充分だ」  
『』とき、は少し言い過ぎだが。

『非観理論』と『無影無踪』とさつきの奇襲と相手が人間であるつていう四つの条件が揃えば《完全干渉》は俺の策で討ち取れる。

「一応聞いておくが、お前は《完全干渉》の大目にしてる物を知ってるよな？」

「ええ」

「それの材質は何だ？ 金属類か？ プラスチックか？ 紙か？」  
「紙ですよ」

「なら……」これだ

俺は虎杖に、ハサミとカッターを渡す。

「これでジョッキとやれ。そうすればあっちの負け、《完全干渉》は俺たちに手出しする事が叶わない」

「……これ、どこから？」

「盗むのは得意な『コードなんだ』

特に深い説明をせずに、曖昧な回答で返す。

「これを持つて、お前は待機場所へ行け」

「一輝先輩は？」

「俺はここで《完全干渉》を待ち受ける」

「…………分かりました」

「おいおい、反応悪いな。『そんなの危険過ぎますー』『ぐらいは言ってくれてもいいんだぜ？』

「策の内なんでしょう？ なら文句は言いません」

「あら、随分大人しい。鋼屈に見習わせたいくらいだわ」

苦笑いをしながら、虎杖は部屋を出る。

……まあ、ちょっと鋼屈のことでショックを受けてるんだろう。

『非観理論』は攻撃的なコードじゃない。助けたくても助けられな

くて、当然なのだ。

だからあまり気にしないほうが良いんだが……まあ俺の策の問題にならないから放置だ。

しかしああ、少しばかり苛立つな。『完全干渉』の奴。

鋼爪にコードを使わせないために痛みを与えたのは分かるが、そこまで恐怖を植え付けるようなことをしなくていいだろうが。

……ムカつく。ああいう壊し方が一番ムカつく。

思い出して、喉元噛み千切つてぶち殺したくなっちまつ。

まあそんな苛立ちは、奴の驚く顔を見て、晴らすとしよう。

「ようこそ、『完全干渉』のコード使用者」

教室に入ってくる男医師の姿を見ながら、俺はそんな事を言つてみた。

撤退（後書き）

さあ、次で『完全干涉』戦は終了。  
つまり序盤戦が終わるわけですよ、早いですねえ～。  
全然書いたような気がしないですよ。月口的に。

## 一人目の敗北者

「よつゝじや、《完全干渉》のコード使用者」

部屋に入ってきた男医師の姿を見て、俺はそう呟つ。

「あれ？ 《完全干渉》を使って俺に傷を負わせたりはしないのか？」

「逃げる相手に対してもそうするが、お前は逃げないんだろ？」

「何でそう思う？」

「お前のコードを使えばそのまま味方全員姿を瞞ます」とも出来た。が、じつして隠れもせずに田の前に《無影無踪》のコード使用者がいる。誘つてるしか思えないだろ？」

「お前を罠に嵌めたいからな。つてか本当に《完全干渉》を使わなくていいのか？ 鋼屈たちとの戦いで幾分か時間を消費しただろ？ けど、まだ4分以上は残ってるだろ？」

「残念ながら4分以下だ」

「それでも、それだけの時間があれば俺の躊躇つて、大切な物を壊して、一人目の敗北者にすることなんて造作もないだろ？」

「お前がその大切な物をコードで隠してなきやな」

「痛みを訴え続けたり、脳に干渉すれば、自然と誰でもコードをくだら」

「簡単に言つてくれる。痛みを訴えることは楽勝だが、脳に干渉してコードを解くなんてのは時間が掛かんだよ」

つまり、今じつして俺と会話しているのはその時間を稼ぐためか。

なら、暇潰しあるまでだ。じつちも策を出すとするか。

「……俺が、この部屋にお前を招いた理由はいつまでもなく罠を仕掛けたからだ」

「そりだらうな。しかし何時まで経つてもその罠とやらは発動しないんだが？」

「まあ、それはお前の隙を突かなきゃ 意味が無いからな。お前が上に警戒しなくなるのを待つてたんだ」

「まさか、さつきと同じ策が通じるとでも思つてたのか？」

「だつて苦労したんだぜ。お前が鋼屈たちと遊んでる間、俺はせつせと重たい荷物をこの上に運んで…… その苦労を無駄にしたくないと思つて当然だろ？」

俺が千秋と別れた後、どれだけ大変だつたと思つてるんだ。

『完全干渉』を討ち取る策を準備するのに手間取り、そして鋼屈たちがピンチになつた時のためようの策を準備して。

上から色々な物を落とすという事は、それらの物を全てそこまで運ばなきゃいけないわけで。

それがどれだけ重労働だか分かるか。ゴミ屋敷を独りで掃除しきる時よりも疲れたわ。

しかもそれだけ手間をかけた策が、通じないとなれば誰だつてブチ切れるに決まつてる。

「余談だが『完全干渉』、この階の上は屋上だ。つまりどれだけ大質量の物を置こうとも、どれだけ物を置こうともいい空間。さつきの5倍近くの物が降つてくるぞ」

そう言つて俺は指を弾く。

パチンッという音と共に、部屋の天井が消え、大量の物が降つてくれる。

当然上に警戒している『完全干渉』は、部屋の床も同時に消えたことに対して動搖をしてしまつ。

重力に従い下へ下へと落ちていく俺と『完全干渉』と大量の物。

そのまま2階、1階へと落ちていく。というか残念ながらウチの学校は地下などないので、1階が終点。

受け身代わりに姿を消し、落ちた衝撃を無にする。

『完全干渉』は空氣に干渉し、衝撃を全て逃がす。だが逃がしたとしても上から落ちてくる大量の物を処理しなければならない。

途中、3階、2階にあった物も加わったので実際に俺が仕掛けた量の倍近くになっている。

それでも《完全干渉》ひとつではそれらを蹴散らすことは造作も無い事なのだろう。

だから加えてやる。この1階に仕掛けた大量の物を出現させて、処理負荷を一瞬だけ起こす。

「ツー？」

そしてその一瞬のうちに俺がやることは一つ。

一つは俺が奴の衣服に触れて、身包みを剥ぐ……とも言い、消し去る事。

もう一つは、上から降つてくる物全てを消し去る事。

身包みを剥いだ理由は簡単。奴が持つてゐる免許証を奪い易くするため。

降つてくる物を消した理由は一つ。

一つはまた処理負荷を起こすため。干渉中の物を消す事で、強制的に干渉取り消しの処理を大量に行わせる。

そしてその一瞬の隙をついて、他者から観測されない虎杖が安全に

《完全干渉》の免許証を切るため。

《非観理論》は他者には観測されないが、決して姿を消したわけではない。

誰にも見られないだけ。だからタンスの角に小指だつてぶつけるし、上から降つてくる物だつて躲さなきやいけない。

でも躲してたら《完全干渉》が次の手を打つてしまつ。だから虎杖の道を邪魔する物を全て消し去つた。

あとは一瞬。

誰も気付かぬ間に、免許証はまるでハサミで切つたかのように真っ二つになつて。

《完全干渉》の敗北が決まる。

皆さん、後片付けという言葉を知っているだろうか？

子供の頃にこう言われた事がある人もいるかもしれない。『おもちゃで遊んだ後はちゃんと片付けなさいよ』と。

そうつまり今俺はその後片付けをしているわけだ。独りで、黙々と。大量に仕掛けたわけだから、その片付ける数も大量である。泣きたいね。マジで。

千秋も虎杖も、鋼廬のケアに行ってしまっている。

『完全干渉』の男医師は、何か喪失感で一杯のような雰囲気のまま、いつの間にか帰ってしまった。

誰も手伝ってくれない。俺頑張ったのに。

しかも、この片付けはなるべく早く終わらせないと学校の七不思議の一につに認定されてしまう。

その場合は何と名付けようか。無難に、墮落場所、とかかな。

「一輝」

丁重に早急に片付けをして、もう大方終わりっていう頃。後ろから千秋が話し掛けてきた。驚くだり、いきなり話し掛けてきたら。

「ちょっと話があるんだけど」

「何だ？」

手を休めずに、応答する。

「何で、梓美ちゃんを助けなかつたの？」

「何言つてんだ？ ちゃんと助けただろ。危険が無いように、姿を

消させて」

「そう言つ事じゃない」

少し強めに、まるで怒っているかのように千秋が言つ。

……やっぱり、コイツにはバレるよな。

「なんで、梓美ちゃんの大切な物が壊される時、助けに行かなかつたの？ 止めに行かなかつたの？」

「勝つためだ。鋼廬も虎杖もいすれば敵になる。だつたら早めにゲームを降りて貰うのが妥当だろ」

「なんでそこまで、このゲームに勝ちたいの？」

千秋の問いに俺が答えないから、しばらくその場に沈黙が漂う。

「…………まさか、家族を元に戻そうと」

「ふざけるなよ千秋。冗談にしたって笑えない」

「……ごめんなさい」

別に謝る必要は無いのに。俺が答えなかつたのが悪いんだから。だから俺は千秋の問いに答えることにする。

「見つけたんだよ」

「…………えつ？」

「コード使用者。たぶん、このゲームの勝者になれば会えるだ

「…………確証は？」

「ほぼ無い。いつも通りの勘つてやつだ」

「勘を優先して、梓美ちゃんを見捨てたつて言ひの？」

「悪いか？」

気のせいか、場の空気が段々と冷え切っていく。

千秋がマジギレしてるのかもしれないが、俺だつて搖りぐつもりはない。

「一輝、言つちや悪いけど……そこまでして追う必要があるの？  
ちいは一輝について行つてるだけで、誰かを見捨てたり裏切つたり  
してまで執着する気は無いんだよ」

「俺も、何で執着してゐのか忘れたよ……それでも、俺と同じ田に  
遭わせてやらないと死ねないと死ねないと死ねないと死ねないと死

## 一人目の敗北者（後書き）

うわっ、バトルをグダつてしまつた……。

グダつてしまつたよ…………英語のノート整理した後だからかなあ  
…………？

まあ、これが俺の実力つてだけの話か。

## 少し昔の関係の無い話

まったくゲームにも千秋にも鋼屁にも虎杖にもその他参加者にも関係の無い話をする。

それはまだ俺が養父（じやうふ）……いや養われたような記憶がほとんど無いからやつぱり義父、濁川是無（にじかわぜむ）（仮名）に出遭つていかない頃の話。

それは俺が濁川一輝ではなく、立崎一輝だった頃の話。あまり裕福な家庭では無かつたが、だからといって貧乏な家庭であつたわけじゃない。

親に厳しく躾けられた記憶はあれども、愛情が無かつたわけではない。

父や母を心の底から尊敬などしていなかつたが、だからといって嫌いだつたわけじゃない。

多分、普通の……どこでもあるかもしれないような一般的な家庭だつたと思う。

俺には姉がいた。本当に血の繋がつた姉が。

姉には随分と遊んでもらつた記憶がある。家にいる時は、本当によく姉に遊んでもらつていた。

しかし姉は随分と曲者であった。

例えば、姉がコンビニに行つた時。

俺は鮭のおにぎりもついでに買ってきて、と頼んだのだが……姉が渡してきたのは昆布のおにぎりだつた。

いや、それだけならまだ許せたであろう。

でもようにもよつてあのクソ姉は、俺の目の前でツナマヨと鮭とオ力力のおにぎりを合わせて数十秒で食い切りあがつたのだ。

俺が文句を言つても軽くあしらつて、最終手段の暴力に頼るつしても、それも軽くあしらわれた。思い出しただけでも腹が立つ。

他にもそんな事を多々やられて、俺はいつかやり返そつと心の中で

誓つたものだ。

だからといって、姉が嫌いだつたわけじゃないし、むしろ好きだつたんだと思ひ。

俺はたぶん、家族全員、皆好きだつたんだと思う。

売られると言つて

い。 売られると言つても、人身売買……臓器などを売られたわけじゃな

未だに俺にもよく分からぬ。ただし俺はある曰突然に両親から裏切られた。

だと思ひ。

でもとにかく、両親が俺を売った事実は変わりやしない。例えどん  
な理由があるうとも。

まあそんな両親は俺が呪詛の言葉一つ呴える間もなく殺された。目の前で。

あつさりだつた。全て味気なかつた。空前絶後といふ奴だろうか？  
多分少し違うんだろうけど。

簡単にまとめればこうだ。

俺の好きだった家族は、ある日、買い物に行くと息子に嘘を吐いて乗車させ、数時間車で移動したのち、よく分からぬ灰色の場所で、見知らぬ男共に息子を渡して、その息子の目の前で、呪詛の言葉を吐きながら両親が殺されることで、崩壊した。

今でも思つ。あの汚い言葉遣いは誰に向かつてしたものだらうか？俺に目線を向けることなく、どこかに叫んでいたあの言葉は一体誰に向けられた言葉だつたのだろうか？

その時、純粹過ぎる馬鹿正直な俺はそんな事を思いながら男共に目隠しをされてどこかへ連れて行かれていた。

「…………」

頭が痛い。若き日の自分の事など思い出したためだろうか？

……何が、何で執着してたのか忘れた、だ。

思いつきり覚えてるじゃないか。嘔吐きもここまで来れば遺伝とか思えない。

遺伝としか…………。

時計を確認する。現在時刻 10：23。

……もしも今日が平日で、学校に行かなきゃいけないんだとしても……今日はいいや。

今日だけは、いいや。

しばらく天井を眺めながら、何かを考えようとする。  
だけど頭が上手く働かず、何も考える事ができない。ただ呆然に漫然に天井を眺める。

。 。 。  
。 。 。  
。 。 。

……このままだと、また眠つてしまいそうだ。  
今眠つたって、良い夢なんて見れそうにない。

どうにか体を起こし、部屋を出る。

腹も若干減っている。遅めの朝食でも作るとするか。  
頭を搔きながら階段を下り、キッチンへと入る。

……異常な程、静かだ。千秋はまだ寝ているのだろうか？  
いや、学校に行つてるという可能性もある。

アイツ、朝食ちゃんと食つたのかな？ 無理に起こしてくれて良かつたのに。

俺の惰眠よりも朝食を食つ事を優先しろよ、まつたく。

冷蔵庫を漁り、適当に炒め、皿に盛り、食つ。

黙つて食つ。だから静かだ。いつもなら千秋がギャワギャワ騒いでうるさいといつうのに。

ああいう夢を見た日には、千秋くらいに騒がしいバカが傍にいたほうが気が晴れるというのに。

学校に行こうか？ ここよりも静かなわけがないし、千秋や鋼凪といふバカに会え……ないかもしない。

千秋には会えるだろう。でも鋼凪は……多分まだ精神的に回復していない。脚の怪我も相当酷い様だし。

今のテンションでは虎杖にも気を遣わせてしまうだけだろう。  
なら今日は、今日だけは家に居よう。

どんなに嫌でも今日だけは、家に。

流し台に食器を片付け、ソファに座る。

特に何かする事もない。暇だ。暇過ぎる。暇はあまり好きじゃない。もつ少しマトモに頭が働けば適当な妄想でも想像でも戦略でも考えられるのに。

よりもよつて頭が働かない。だからまた天井を見る。

ただ偶然と、ただ漫然に、天井をひたすら眺める。

今日は、あまり気分のいい日じゃない。

## 少し昔の関係の無い話（後書き）

うわっ、暗ツ！

いきなりなんで下衆主人公が鬱になつてるんですか！？  
あのどんな罪を犯そうとも罪悪感というものを蹴散らしそうな下衆  
主人公が！！

……っていう風な判断を下されてる主人公って何なのさ？

## 少し昔のやうでもいい話

俺が目隠しをされて連れられた場所は、これまたよく分からぬ灰色の空間だった。

いや灰色というより、確か暗かったから黒っぽいような感じだったかな？

そこで見たのは、檻の中には、姉。

鎖で繋がれ、身動きが取れない姉の姿を見た瞬間、俺はこう思った。ああ姉ちゃんもあの人達に売られたんだ。あの人たちの死を聞いたら喜ぶかな？　いや喜ばないだろうな。

そんな風に俺は思っていた。

物音とかで、誰かが近くにいると思つて姉は顔を上げた。

そして俺がいる事に驚いて、しだいに悲しそうな顔をして謝つてきた。

何で姉が謝るのか、俺には分からなかつた。分かりたくも無かつたんだと思う。

悪いのは俺たちを売りとばした両親で、姉が謝る必要はどこにもない。

そう思つていた。

そしたら悪の権化……という言い方は失礼だろう。両親の死体が俺と姉の前に運ばれてきた。

多少乱雑に運ばれたのだろう。俺が見た時よりも汚れや傷が増えていた。

そしてその死体と共に、人間がやつてきた。

暗くて見えなかつたが、多分、男だ。女だつたかもしれないが。

声を覚えていないのが一番惜しい事だ。

その人間は姉に問うてきた。両親を生き返らせたいか、と。

姉はイエスと答えた。俺もその意見に賛同だった。生き返らせて、一発ぶん殴つてやりたいなどと思っていたからだ。

でも幼く、純粋で、馬鹿正直だった俺にも分かっていることがあった。

死んだ人間は生き返らないということだ。

なのには生き返らせたいかと聞いて来た。多分、バカにしているのだろう。そう思った。

でも違った。生き返った。俺と姉の願い通り、両親は生き返った。生きかえった両親は、俺と縛られている姉の姿を見て、謝ってきた。そして人間の姿を見て、またあの時の呪詛ように汚い言葉を吐き捨てた。

だからだろうか？

直後、両親は壊された……いや人の場合は殺されたか。殺されて、人間が「おっと、つい誤つて殺しちまった」的な何かを言つて、また生き返った。

痛がっていた。一人とも痛い、痛いよ、と泣くように呻いていた。次第に痛みが治まつたのか、さつきのように俺と姉にひたすら謝つてきた。

人間には目も向けずに、ただひたすらに俺と姉へ謝つていた。何を謝つていたのか、何を言つていたのかは覚えてない。けど二人とも謝つていた。

だからだろうか？

またすぐに壊された……殺された。

殺されて、人間が何かを言つて、また生き返つた。

色々なところを搔き鳶る様に呻きながら、今度は人間に呪詛の言葉を吐き続けた。

俺と姉には目も向けず、ただひたすら人間に向かつて汚い言葉を吐き続けていた。

だからだろうか？

すぐさま壊された……壊し、殺された。

殺されて、人間が何かを言つて、また生き返つた。

搔き鳶り、搔き鳶り、呻きながら、謝つていた。

人間に謝っていた。涙を流しながら謝っていた。とにかく謝つていた。許されようと必死に謝つていた。

きっと何度も殺されて心が折れたんだろう。だからさつきまで呪詛の言葉を吐き続けた相手に謝っているんだ。

だからだろうか？

今度は徹底的に壊された……壊して、壊して、殺された。

姉が泣き叫んでいた。もうやめて、と。

俺は姉まで殺されるんじゃないかと心配になつていた。

だけど人間はその姉の言葉を無視して、また生き返らせた。

生き返つて、悶えて、謝つて、また両親は殺された。

そして生き返つて、悶えに悶えて、謝り続けて、また両親は殺された。

そして生き返つて、悶えに悶えて、謝り続けて、また両親は殺された。

ずっと姉は泣き叫んでいる。やめてくれ、と泣き叫んでいる。

俺はずっと見ている。何故？  
状況について行けなかつたから？ 違う。

恐怖に身も心も震わせていたから？ 違う。

こうなつて当然のことをしたと思ったから？ 違う。

諦めていたのだ。全部、もうこの円環から両親は逃れられない。

生き返り、悶え、謝り、壊され、そしてまた生き返る。

このループから逃れる術を両親は持つていないし、俺もこのループを止める術を持つていない。

だから諦めた。諦めて見ることしかできなかつた。

奇跡なんて待ち望めなかつたし、目を逸らしたところで耳から無残な光景が想像できてしまつ。

現実からは目を背けられない。妄想へ逃げることなんて不可能だ。

姉は泣き叫んで、目を逸らして、諦めずに……止めて、と叫び続け

る。

多分、今だから思えることだが……ずっと姉が諦めなかつたから俺は直視することが出来たんだと思つ。

俺が諦めてしまつたことを姉が諦めずにいたから、俺は俺でいられた。

だからだろうか？ いやそれもあるが多分、人間の器的に限度を超えて過ぎてしまつたんだろう。

姉が壊れた。姉の精神が壊された。壊れた。壊れ死くした。笑い出した。あひやひやうひやひやひや、と今まで聞いた事のない声で笑い出した。

何が嬉しいのか分からなかつた。恐かつた。壊れた姉が。

姉の全てが怖くなつた。今まで両親を死を何度も見たつて震えもしなかつた……震える事もできなかつた体が震えだした。

笑いながら、首や全身を無理矢理動かし、本気で鎖を引き千切れりとする姉が、自分の知つてゐる姉では無い氣がした。

無理に体を動かしてゐため、どこからか少しづつ出血する。それでもその自分の血を浴びながら姉は笑い続けていた。

逃げ出したかつた。逃げ出せなかつた。逃げ口などそう都合よくあるものじやないんだ。

ある意味、釘付け。あの人间のことなど思考の端くれにもなかつた。

俺の视界には、恐怖の象徴となつてしまつた姉がただいるだけだつた。

少しこのじつをここに話（後書き）

いやほほほほー！

ヘッドホンして書いてるから耳が痛い…………。

## 少し昔のくだらない話

気付いたら、壁を……天井を見上げていた。

意識が途切れていった。気付いたら、レンガの壁に囲まれた場所に居た。

どこだか分からなかつた。分かつたところで仕方が無かつた。どうせ俺以外誰もいないのだから。

……嘘を吐かれた。家族全員に。そう感じた。

両親には騙され、姉には本性を隠されていた。そう感じた  
何で騙されたんだろう？　何で隠されていたんだろう？

俺が無力だつたから？　俺が非力だつたから？　俺に何かを成す力  
が無かつたから？

そう感じて、よく分からぬけど泣いていた。

泣いて、泣いて、泣いて、泣いていた。

始めは涙が出て、次に声を上げて、泣いていた。

途中から何で泣いているのかを忘れてしまつたが、それでも泣きた  
い気持ちだかつたから泣いた。

泣きまくつて、水分を大量に出して、声が嗄れるほど喫いて、そし  
て。

「ここにちわ」

誰かに声を掛けられた。

最初は幻想だと思った。それを確かめるために体を上げて、誰か居  
るのかを確認した。

そうして、その声の主を自分の幻想だとなおさら思い込んでしまつ  
た。

壁の隙間から漏れ出す月明かりに照らされ、微かな煌めきを放つ銀  
色の髪。

両目の中はそれぞれ違う色で、蒼い瞳と琥珀色の瞳をそれぞれして  
いた。

そんな今まで見た事のない容姿をしたその頃の俺と同じ年齢くらいの少女が、居た。

声を出せず、それでも思った。天使がいる、と。  
そして恨んだ。もしも俺の前に降りるのだったたら、もう少し早く降りてくれればよかつたのに。

神も仏も、まつたくもって無情なものだ。

でも、それはただ自分の無力さから逃げ出すための言い訳にしかならず、また泣きたくなつた。

そんな俺の心情を分かつてているのかいないのか、よく分からぬが少女は微笑みかけながら俺に問う。

「ねえ、なんで月は明るいんだと思う?」

それが、濁川千秋が俺に最初に聞いて来た質問だ。

~~~~~

「…………

また寝ていた。よりもよつてソファで寝ていた。  
首を上げて寝ていたから、肩や首筋が異常に痛い。マジ痛い。どうすんだよコレ。

ともかく、天井に橙色の光が照らされているから多分、夕方になつたんだろう。

10時半から夕方までって…………5時間以上は寝てたのかよ!?  
そりや首痛めるわ。どうすんだよ、マジで痛いぞこれ。

まあ、それは仕方が無いとして。

「…………おい、千秋。何テメエは俺の膝の上乗つてんだ?」

痛む首を下げ、真正面を見ると割と間近に千秋が居た。距離にして数十センチ。

俺の膝を跨ぐよつとして座り、もう胸板に両手をついて押さえつけようつに対面している。

どんだけ近いんだよ、バカ女。

「一輝、泣いてたから」

「は？」

「いや、だから一輝が泣いてたからその涙を拭いてあげよ」と

「泣いてた？ 僕が？」

悪名が今にも轟きそうなこの俺が？ あの夢で泣いていた？

まだ泣けた？

「……つていうか千秋。別に俺の涙拭ぐのに、こんなに近くなきやいけない理由はあるのか？」

「実を言つと、バランスを崩してこんな状態になつて、そしたら一輝が起き出しちゃつたんです。すいません！」

「…………別に、お前のせいで起こされたわけじゃねえよ」  
それも少しさはあるかも知れないが。別にそれで無理に起こされたんじゃない。

「おいバカ千秋」

「はい」

「取り敢えず、今すぐこの体勢を止める。お前の息が掛かつてしまふがない」

「はにゅッ！？」

よく分からん声を出しながら、千秋が飛び退くよにして移動する。氣のせいか夕田のせいか、千秋の頬が少しばかり紅潮しているようないないような。

多分、氣のせいだな。こいつに恥じらいといつて常識が身についてるんなら、家を「ミミ腫敷に変えるわけがない。

「おい千秋。お前、今日は何食べたい？」

「え、作ってくれるの！？」

「ドアホ。お前の食べたいものを今から作つて、お前の田の前で美味しそうに見せびらかすようにして食つんだよ」

「じゃあ、ハンバーグ！」

輝いた千秋の顔をどん底に落としたいがために、わざわざあんな事

を言つたのに、「イツ、笑顔で答えやがつて。

ああ、なんか今日はついてない日だ。自分の言葉も切れが悪いよう

に感じる。

なんか調子悪い。つていうか首痛い。なんか千秋を騙せなかつたのが悔しい。

「子供か」

千秋の言つた料理名にも、悪戯が失敗して拗ねている自分にも、そんな事を思つて呴いてみる。

俺はキツチンではなく自分の部屋に向かい、着替えをすまして玄関に行く。

「どこ行くの？」

「冷蔵庫にひき肉なんて無いからな。わざわざ買いに行くんだよ」

「ちいも行く」

「お前は買い物力「〇にお菓子とか入れそうだからダメだ」

「そんな子供っぽいことはしないよ！」

「どうだか。ちいちい言つてる奴がそんなこと言つたつて説得力が無い」

そう言つて、俺は勝手に玄関を出ようとすると、その前に千秋に腕を掴まれる。

むくれた顔をしながら千秋は、

「ちいも行く」

再度自分の意見を主張してきた。面倒な奴だ、まったく。

「腕を掴むな。虎杖とか学校の奴に見られたら恥ずかしいだろ？」

「うん」

パツと俺の腕を離して、すぐさま千秋は靴を履く。

もう今日はダメだ。何か舌が上手くいつもみたいに回らない。

「鍵閉めてから来い」

「分かつた」

無邪気に笑う千秋を連れて、俺は近くのスーパーに行つた。

何か今日はホント、良くない日だ。

## 少し昔のくだらない話（後書き）

意味不明な文章はここで終わって、次からはバトル無し、騙し合い無しのお遊び回ですよ多分。

つていうか結局、一輝の勝ち残りたい理由つて何なんでしょうね？

## お見舞い

「そろそろ動き出す

「えつ？」

スーパーで色々と買って、家帰つて、食材洗つたりして、みじん切りして、こねて、空気を抜いて、型作つて、焼いて、蒸して、さらり盛り付けて、食つてる最中。

見せびらかすように俺がハンバーグを食い、釣られて千秋もハンバーグを口にしている時。

俺はそう言った。

「それってどういう事？」

頬にケチャップを付けた千秋が俺に問つてくる。

「打つて出る、つてことだな。ケチャップ拭け」

「ありがと」

俺が差し出したティッシュで頬を拭き、続きを訊きたそうな顔をしてきた千秋。

「今までは参加者の誰かが動き出すのを待つてたが……まあ『完全干渉』がよりもよつて俺たちを標的にしてきたからな。こっちが手を組んでることは他の参加者にもバレただろ」

「だから、隠れることから潰し合つことに変えるの？」

「現参加者は7名。こっちには3名。残りは4名。でも、鋼風の協力が得られればこっちも4名。人數的には対等に立てる」

「……でも、敗者はゲームに介入できないんじゃないの？」

「ゲームじゃない。敗者が禁止されることは、物の破壊と参加者の殺害だ。協力してもらう分には問題無い」

「じゃあ、他の4名だって『完全干渉』に話を持ちかけるかも……」

『完全干渉』はその話を棒に振る。アイツは元々……学校に来る前から俺たちの事を調べてた。多分、アイツには4人が手を組んでたこともバレてただろう。それでも奴は独りでやって来た

「……他の参加者と協力する気なんて更々無かつたから？」

「その通り。だから奴は、協力しない…………つっても俺から話を持ちかけるつもりでいるんだが」

「…………一輝って、昔より外道になつたよね」

「勝つためだ。その為だつたら外道だろうが下衆だろうが鬼畜だろうが悪魔だろうが何だつてなつてやる」

「そう…………。でも誰とも協力する気が無い『完全干渉』が手を貸してくれるとは思わないんだけど」

「そういう時は『非観理論』の使い時だ。情報を集めれば自然と見えてくる、アイツのゲーム参加理由」

まあ、口クでもない事だとは思うけどな。

利点があれば『完全干渉』は俺に協力するはずだ。

「ともかく……まず次に誰を敗退させるかだ」

「それより前にやる事があるよ」

「…………えつ？」

千秋の言葉に俺は耳を疑つた。

俺が何かを見逃していた？ そんなバカな。まだ悪夢心地つてことか？

「梓美ちゃんのお見舞い。一輝はまだ行つてないよね」

「面倒臭い。バス」

「『非観理論』を使うんでしょ？ 『否定定義』が無ければ聞き出せないんじやない？」

「くつ……」

千秋に極めて正論を言われてしまつなんて…………ホント今日は調子悪い。

「…………分かつた。いつ行けばいいんだ？」

「明日」

「あーーと、その…………」

「行くよね？」

「…………はい」

バカな千秋に言い包められてしまうなんて……もう今日はダメだ。

ダメの日だ。

ああ、もう、調子が狂う。いつものペースじゃない。

「御馳走様」

「いりやつせーま」

翌日の放課後。

学校を無断欠席したんだとずっと思っていたんだが、どうやら昨日は勤労感謝の日だったらしい。

つていうことは、もうすぐ11月も終わるんだなー。  
つーか、昨日、千秋はどこに出掛けたんだ……つて、鋼嵐の  
お見舞いに行つてたのか。

普通に考えればそうだろうな。多分。

「おーい、鋼嵐、元気かー」

病院の個室のドアを開け、適当に間延びした適当な言葉を投げかけてみる。

「…………」

返事が無い。ただの屍のようだ。

……じゃなくて、ただ普通に寝ているだけである。

「……タイミング悪いね」

「だな」

一緒に来た千秋の言葉に激しく同感しながら、室内に入る。  
病院の個室……人生初の侵入である。

あんま怪我しても病院なんて行かなかつたからなあ。

「ちい、お花の水、変えてくるね」

「分かった」

適当にあつた椅子に座つて呆然としていると、千秋がそんな事をいつて花瓶を持って出て行つた。

……する事が無い。ある意味、氣まずい。

いつその事、本人を起こしてしまおうか。ぐっすり寝ているのがム

力つくし。

いやしかし、これでも俺は人の子。それはやつてはいけない気がする。

まあ、でも鋼仮だしイイかな？

「……イイわけないでしょ、変態覗き魔」

「あれ？ 起きてたか？」

俺が行動に移るうとする前に、鋼仮がうつすらと瞼を開けて、体を起こす。

「何しに来たの、カス？」

「何つて、千秋の付き添い」

「…………濁川先輩は？」

「花の水変えるとか言つて出て行つた」

「そう……」

「…………お前、大丈夫か？」

「何が？」

会話が途切れそうだつたから、適当な言葉を投げかけただけなんて言えない。

「脚とか……精神的な面とか」

「脚の方は治つてきてる。精神的な面つてのは意味が分からない」「ならそれでいい」

「うん、やっぱ氣まずいからー田退室ー」

## しおり

「なあなあ、千秋さんや」

「どうしたの一輝？」

適当に千秋を探しに行つたのは良いのだが、数十秒で見つかるから嫌なんだよな。

もうちょっと手間を掛けさせろ。あの空間に俺を戻させるな。  
つていうかいつその事、相談してみるか千秋に。

「俺、なんかあの空間、気まずいんですけど」

「それは一輝の心に罪悪感といつものが生きてる証拠だね。良かつた、良かつた」

「良くは無い。何が良いんだよ」

「直したげ。ヘヤピン」

「……それが目的かよ」

俺はようやく千秋が見舞いに行かせた理由が分かった。  
ようは壊れてしまつたヘヤピンを即刻直せとの依頼だつたわけだ。  
しかも依頼料は俺の罪悪感。最悪だね。

「無理だ」

まあでも、それが出来たら俺だつてすぐにやつてるわけだよ。  
気持ちを落ち着かせるために、即刻に。

「嘘吐き。一輝なら出来るでしょ？」

「お気に入りを変えたくはない。それに色々と下準備が必要だ。今  
すぐ直すのは無理」

「ちいが居れば、下準備なんて必要ないでしょ？」

「まあ、それでもないわけだ」

ともかく今すぐは出来ない。それが結論。

「じゃあ、一輝が何か作つたげて」

「……は？」

「梓美ちゃんに、一輝が、何かプレゼントしてあげて

「俺のプレゼントなんてすぐに捨てるぞ、鋼冂は」「じゃあ、すぐに捨てそういうプレゼントをあげて」  
「わお！」の銀髪、なんていう無茶振りしてきやがるんだ。  
「時間稼ぎはしてあげるから、あと一時間以内に作って」「姫様？ それは私には無理な所業で」ござこます」

「作れ」

「無理だつてんだろうが、人の話を聞け」

「作れ」

こっちの話は聞かないってか？ 上等じやねえーか。  
多少プランに変更はできるが、バカ千秋に売られた喧嘩を買わないわけにはいかないだろ。

「1分。病室へと戻る」の間に創つてやるよ」

「凄いね、一輝はもしかしたら作家とかになれるかもよ？」  
「なりたくないし、あの程度のでつち上げなら幾らでも誰でも作れる」

「…………？ 濁川先輩、何の話をしてるんですか？」

病室へ戻つてくるなり鋼冂が質問をかまってきた。  
まあ俺じゃないから良いんだけど。

「一輝の発想の凄さについて話してたの」

「俺は自分の発想よりも、お前のバカさ加減に驚くがな」「だつて優しい幻想と厳しい現実だったら、優しい幻想を信じたくなるもん」

「…………だから何の話をしてるんですか？」

主語が抜けたような会話をしてたからか、鋼冂が不貞腐れ始めた。  
会話の輪に入れないからつて不貞腐れるなよ。子供かよ。

「ほら」

仕方なく、俺はポケットから鋼冂にある物を渡す。

「…………しおり？」

「そう。一輝がなんか気まずいからって作ってきたの」

四葉のクローバーの押し花がしてある栞を見ながら千秋が言つ。

といふか嬉しそうに語る千秋を一発ぶん殴つてやりたい。

「気まずい……何が？」

「一輝はね、梓美ちゃんが怪我したこととか物が壊されたこととかを自分にも責任があると思ってるの。だから壊れたヘヤピンの代わりになればっと思つて作つてきたの」

「…………ふつ」

何を考えて吹き出したのかは知らないが、失礼な事に鋼冴は、俺の顔をマジマジと見たあとで吹き出しやがった。

まあ、似合わないとか思つてるんだろうけどね！　そのくらい自分で分かつてるわ！

俺だつて恥ずかしいんだよ、こんな嘘！

「似合わない…………ふはははは！」

「言つた！　笑うな！　自分でつて知つてるわボケ！」

鋼冴、大爆笑。ムカつくくらいに大爆笑。

こいつの辞書には失礼つて単語の意味は載つてないのか？

「い、ごめん……あまりにも面白くて」

そう言う鋼冴の顔は、今まさに笑う事を限界まで耐えようとしてる顔だった。

こいつ、まだ笑う氣だ。

「でも…………これは…………似合わな過ぎる…………ふふふははははははは！」

「だから笑うな！」

「笑うしかなって、これはもつ！」

もう耐えることを諦め、ベットをバンバン叩きながら鋼冴は大爆笑してやがつた。

千秋の野郎…………あとで覚えとけ。

「で、でも一応大事にはするよ……ふふつ…………ははははははは……！」

「あー、でもお前じゃ読める本も無いし返せよやつば」「ヤダ。これ一生物のネタにできるからー。」

「ネタとか言つな！ やっぱり返せー。」

「ほらほらー輝、そろそろ帰るよ」

「千秋、テメエ……本当に覚えとけよー 十倍で返してやる

「うん、そうだね。だから帰ろう、もつ」

ぎゃああああ！ 千秋ごとに軽くあしらわれたあーーー！  
もうダメだ、俺のパーソナリティがズタズタだ！  
ボロボロを通り越して、ズタズタだ！

「あ、そうだカス」

病室を出て行く前、鋼嵐が声を掛けてきた。

「何だ？ 文学少女になる宣言でもするのか？」

「違うわ。これはちゃんと大事にする。それと

言葉を一旦区切り、鋼嵐は笑顔でこう言つた。

「もう、わたしは大丈夫。お蔭様で立ち直つたよ」

「……そりや良かつたな」

まさか、鋼嵐から礼を言われる口をくれるとは。

なんか調子狂うんだよな、最近。

ホント、なんとなく調子を狂わされてばかりな気がする。

「貴女が『干涉不可』ね？」

「……誰？」

夕方の電車内にて、とある少女が誰からか呼びかけられた。席に座る事なく、外を向いて乗車している少女の視界には絶対に声の主が映るはずもない。

だから問いかけた。

「『禁思用語』って言葉だけで分かってもらえると嬉しいんだけど」

「……ゲーム参加者、ってわけね」

声の主……『禁思用語』の姿も見ずに少女は会話を進めてしまひ。その少女の態度に少し苛立ちながらも、『禁思用語』は少女にある話を持ち掛け始める。

「ねえ、ちょっと協力しない？」

「協力？」

「そう協力。今ちょっと勢力を集めているの」

「……何で？」

「先日、『否定定義』が『完全干涉』に、『完全干涉』が『非観理論』に負けたの。知ってる？」

「初耳ね」

少女が集めている情報は、ゲームの進行状況ではない。だからその情報は本当に初耳だったし、別にどうでもいい情報でもあつた。

「それで分かつたんだけど『非観理論』『否定定義』『異見互換』『無影無踪』の四人が手を組んでるの」

「…………」

「いつも『結論反転』とは手を組んでるんだけど、それでも二人。『否定定義』が抜けたからといって、三人には勝てそうもないわ」

「……あたしに頼るより『完全干涉』に頼った方が可能性があるか

もよ?「

そつ提案する少女に対し、《禁思用語》は少し溜息を吐きながらこう答える。

「アイツはダメ。完全に一匹狼っていう性格してるし、誰かと協力なんて考える性質じゃない」

「へえ……」

「で、貴女はどう? こっちに協力しない? できれば強制的に協力してもらいたいんだけど」

「するわけないでしょ、バーカ」

少女がそう言いつと共に、停車し、車両のドアが開く。

「あ、ちょっと」

そのまま自然と電車を降りようとする少女の肩を掴み止めようとするが《禁思用語》が伸ばした手は、少女に触れる事無く、空を切る。

「じゃあね《禁思用語》。次遭う時がないことを祈るわ」

ドアが閉まり、そのまましばらく少女は行ってしまった電車の方向を見る。

(…………どんな形であれ、これでやっと《無影無踪》に辿り着けるか)

そつ思いながら、少女はホームを降りたって行つた。

「べえくしょんつ! ! !

うう……なんか寒気がする。

鋼凧か? 鋼凧あたりが俺の悪口を言つてるのか?

まあ、それでもいいから鋼凧にはさつさと怪我を直してもらいたいでなければ《非観理論》が使えないからだ。

別に鋼凧に無理をさせれば使えない事も無いんだろうけど、千秋が

『梓美ちゃんはまだ怪我人なんだよ!』とかつるさく文句を言つてく。

ああ本当、さつさと鋼仮の怪我なおんねえかなー。

溜息を吐きながら天井を見上げる。

現在は家中に独り。千秋はどうかに買い物に行つた。ついでに頬んだ食材をしつかり買つてきてくれるだろうか？  
色々な事が詰みに詰んで、家中でただ静かに待つだけでも気が詰まる。

『無影無踪』は窃盗にも奇襲にも隠蔽にもスパイにも向いてるが、なんせ、相手が何処の誰だか分からぬ状況だとパソコンと動くことも出来ない。

だから今は『異見互換』の視界を共有できるルールを使って、映像のみの情報を千秋に集めてもらつてはいる。

『非観理論』が居るのに、こんな効率の悪い方法でしか情報を集められないなんて……。

状況的には最悪。こちらから仕掛ける事が困難過ぎる。

まあ、こんな状況を作り出したのは他でもない『完全干渉』と俺である。

自業自得とはこの事か。まったくもって笑えない。

「遅いなあ…………」

千秋は一体どこで何を買つているのだろうか？ 帰つてくるのが遅く感じる。

まあ俺の体内時計が焦りと共に異常な早さで進んでいるだけかもしれないが。

やりたい事があつても、やれる状況ではない。

この前のように呆然と漫然と天井を眺めていたら寝ていたというオチも嫌だ。

さて、どうするか…………。

一人才セロでもするか？ いや、俺がしたくない。

そんな風に、適当に思考を回していたら千秋からのメールがあつた。  
もしかして…… 買い物の途中で何かあつたのか！？

『ちい、くじ引きで3等当たった！』

おめでとさん、と短く返信をし、俺は携帯を放置する。

そもそも何かあつた後にメールなんてしてこれるのか？ そういう

冷静な考えが足りなかつた。

本当、この前から思考が絶不調だ。別に平和ボケをしたわけでもないのに。

悪夢ボケという新種のボケ型だろうか？

まあ、そんなのどうでもいい。まったくクダラナイ事を考えることだけはいつも通りだ。

いつの間にか放置していた携帯電話がまた振動している。また千秋からのメールだろう。

『梓美ちゃん、明日退院だつて！』

「……………ハア」

思わず安堵の溜息を吐いてしまう。これで明日から動き出せり、色々と。

詰んでいた状況が一気に切り開けてきた。

返信はせずに、そのまま携帯の電源を切る。

この勢いだと多分、千秋がくだらないメールをいくつもしていくんだろうなと思ったからだ。

交錯（後書き）

また もう あただよ。ほんと、あつたく。

「3100円、か……」

とある雑居ビルの2階にある診療所の診察室にて、春永氷雨は椅子に座りながらそんな事を呟いた。

彼の視線の先にあるのは、医師免許証。

先日、虎杖によつて切断されたため、再交付をしてもらつたのだ。  
（……命と同等に大切にしていた物の価値は、3100円か……  
……）

医師免許証の再交付には手数料として3100円が掛かる。  
その値段がどうも、自分が大切にしていた物の価値に思えてしまう。  
ゲームの敗退条件である、物の破壊によつて氷雨はプライドに少し  
ばかりの傷を負つていた。

（……安い紙切れだとしても、一応は俺の誇りだつたんだけど  
なあ……）

そんな事をぼんやりと想つてゐると、どこからか鈴の音が鳴つた。  
診療所のドアに付けてあるものだ。誰か来た時に分かり易いようこ  
付けておいた。

「ちゃんと見ておけよ……今日は休診日だらおが……」

そんな事をぼやきながら、それでも自分がドアの鍵を開けていた事  
にも少しばかり呵責があると思い、仕方なく診察室から出で行く。

「あのー、すいませんが今日は休診日なんで

面倒臭そうに頭を掻いていた氷雨は、途中で言葉を切る。

理由は簡単。

相手が面倒な屁理屈を立て並べる前に、脳に干渉して追い返さうと  
思つていたからである。

その干渉が、出来なかつた。

氷雨は来訪者の姿を確認する。少女だ。

赤みを帯びた瞳に、髪型はボーテール。まだ少しばかり幼い顔付

きに、身長などの見た目からして中学生だろうか。

そんな少女に自分のコード《完全干渉》が通用しなかつた。

となるとこの少女も、コード使用者か。

「 何の用だ？ 新聞の勧誘も、ゲーム関連の勧誘もお断りなんだが」

「 勧誘じゃなくて提供してもらいたいんだけど」

「 何をだ？ 何にしろ断るが」

少女が自分を訪ねてきた理由は、おおむね察しがついていた。わざわざ敗者である、もうゲームに参加していない自分に求めるものなど二つなどしかない。

一つは、先日来た《禁思用語》と同じ、ゲームを有利に進める為の協力。

もう一つは、とある四人のコード使用者についての情報提供。そのどちらかだ。

「 《無影無踪》についての情報提供をしてもらいたいんだけど」

「 ムカつく野郎だった。俺から言えるのはそれだけだ」

そう言って、氷雨は指を弾く。

途端に無数の氷の針が出来上がり、少女へ向かって一直線上に突撃する。

しかし氷の針は、少女の身に触れる前に蒸発したように溶けて無くなる。

「 やつぱりお前の「コードは《干渉不可》」か」

「 そう。貴方との「コード相性は最高よ」

《干渉不可》のルールなど楽に検討がつべ。

あらゆものからの干渉を拒絶する。

大方、そう言ったものだろう。故に氷雨のコードによる干渉の類は一切効かない。

氷雨からしたら、天敵のようなコードだ。

「 はあ……ゲームに負けたのを教訓に、隠居生活でもしようとかと思つたのに

『禁思用語』も『干渉不可』も何故、負けた自分などを構つ暇があるのだろう?

まだ参加者は7人もいるのだ。そちらに構えればいいのに。  
溜息を吐く氷雨の姿を見て、勝利を確信したのか、少女は歩いて近付いて来る。

「さあ『無影無踪』の情報を

「

「嬢ちゃん、生意氣に俺に命令しようとしてんじゃねえーよ」

そう言うと氷雨はもう一度、指を弾く。

そんな言葉も行動も気にせずに近付いて来ていた少女は、急に膝をつくことになる。

いきなり立ち眩みのようなものがしたのだ。

「あらゆるものを拒絶する、あらゆる者から観測されない。そんなルールがチートだと思えるのは高校生までだぜ。大人の世界はもつとシビアだ」

胸に苦しさを覚えながら少女は動搖する。

自分には、あらゆるものも干渉できないはずなのだ。コードであれ物理法則であれ、少女が拒絶してしまえば干渉できなくなる。なのに、どういうわけか氷雨の「コード」によって今自分は干渉されている? そんなわけがない。

自分のルールは絶対だ。

その通り。少女の思考は一部分を除いて何も間違つてはいない。

「別にお前に干渉できなくても、他のものには干渉できるんだよ。

バーカ」

ようは氷雨はこう言つている。

直接干渉が不可能な相手には間接的に干渉すればいい話だ、と。

『非観理論』の時は、どこに居るかが分からなかつた為、いつまでも全域攻撃をし油断を誘う事しか出来なかつた。

しかし今回は違つ。

コードを無効化する『否定定義』も居なければ、相手の姿だつてしまふりと見える。

ならば相手の周りの環境に干渉し、相手に間接的にダメージを与えるべき。

例えば、少女の周りの酸素濃度をゼロにするように干渉する、とか。そうすれば少女は息を吸う事はできず、息を吐けば、そこに含まれる幾分の酸素も除去できる。

「がはつ…………けほつ…………ツ！？」

少女は首辺りを龜るのみで手を動かしながら、空氣を求めるように悶える。

このまま行けば、窒息死……いや、それよりさきに脳死をしてしまうだらうか？

ともかくこのままでは少女は死んでしまう。

悶える少女の姿を見ながら、氷雨は干渉を解いた。

「かはつ…………けほ、けほ、けほツ！」

咽るように咳をする少女。いきなり新鮮な空氣を吸ったためかどうか？

元から氷雨に少女を殺す氣などなかつた。そもそも殺す事すら許されない。

ゲームのルール上、敗者である氷雨が、参加者である少女を殺す事は適わないのだ。

「これに懲りたら、今すぐ帰りな」

そう言つて、氷雨は診察室へ戻ろうとする。だが。

「ツ！」

数秒で呼吸を整えた少女は、飛びかかる様にして氷雨の首を掴み、そのまま全体重を掛けて氷雨を押し倒す。

「拒絶！」

いきなりの事で流されるまま床にうつ伏せ倒れてしまった氷雨の首に、少女の手から押し潰すように圧力が掛かる。

それは人の体重を掛けて潰すものとは違つ。

少女の手に触れられている部分が、無理矢理内側に押し込められる

よつな感覚。

無理に少女の手から離れようと皮膚や筋肉が内側へ、内側へと逃げ  
いるような感覚。

このままでは氷雨の首の中が変形してしまつだらう。

(…………このガキ…………ツ！)

少女を退けようにも、直接干渉が出来ない上、この至近距離では間接的に干渉した場合、自分自身にも影響が及ぶ可能性がある。  
そしてこのまま首に手を当てられていれば、愉快な首の形をした死体になつてしまつ。

氷雨は、少女に降るしかなかつた。

**提供者（後書き）**

『完全干渉』あつさり敗北。  
まあ、ゲームのルールと、相性の問題が重なったからなあ

## 快氣祝い

「鋼嵐梓美、復活しました！」

「ああ、それはよかつたな鋼嵐。ところで千秋？ この状況を説明してくれ」

鋼嵐の復活宣言を蹴り飛ばすように流し、千秋に問いかける。

今日は11月最後の日曜日。

退院した鋼嵐の快氣祝いをすると言われて、千秋に引っ張られるまま連れて来られた場所は……県内にあるウォーターパーク。そう言えば、くじ引きで3等が当たったとかなんとかメールしてきました記憶があるが。

まさかこのウォーターパークの無料入場券とかそういうふざけた物を当てたわけじゃないだろうな千秋の野郎。

いやでも、そんな在り来たりな回答じゃないことを祈りつつ俺は問い合わせた。

「これからプールに行くんだよ

しかしながら、俺の夢い幻想は千秋の一言によつて悉く打ち砕かれただのだった。

……嫌な予感程、よく当たるものはない。

11月の最終日曜日……まあ言い換えれば、月末といつてもいいだろ？

そんなもう冬場といつても過言ではない季節に何故、プールなのだろうか？

夏なら分かる。春でも分かる。秋だとどうにか分かる。冬は絶対に理解できない。

冬 プールである。これが世界の常識であり真理といつてもいいと思つ。

「皆、ちゃんと水着は持つてきた？」

「はい！」

「ええ、まあ一応」

鋼仮、虎杖が千秋にそう答えるのだが、幾分俺には理解できない。そもそも、俺は千秋に一言たりとも水着などと言われていない。

「だつてプールだつて言つたら、一輝泳げないから嫌がるじゃん」

「え、カスつて泳げないんですか？ ダッサーイ」

千秋の一言にたまらず鋼仮が食いついてくる。うん、こりや完全復活してゐるな。

後で覚えておけよ、このバカ女二人。

「まあ一応水着も貸出してるみたいだから、大丈夫だよ一輝」

「千秋、お前は本当にあとでシバくからな」

「一輝、そんな事言つたら、水の中に沈めるよ

互いに笑顔で微笑ましい会話をする俺と千秋。うんうん、仲が良い

つてこういう事を言うんだな。

「珍しい……濁川先輩の目が笑つてないなんて」

そんなことを鋼仮が言つていたようないなかつたような。まあ、どうでもいいか。

「さ、皆早く中入っちゃお

千秋の案内で俺たち四人はホテルに入つていった。

「おお！ 憐おい！」

そりや、ウォーターパークだもの。

ウォータースライダー や流れるプールだつてあるに決まってる。

しかし、さすがに冬場なので屋外施設は使えないという表示があつた。

でもまあ、屋内施設だけでも充実している。

……全て、泳げない俺にとつてはどうでもよいことだがな。

「でも、正直言つて……こういう場所に来たからつて盛り上がりませんよね」

珍しく虎杖がノリの悪い事を言つ。いつもなら思つても口に出さな

い性質なのに。

「女性の水着姿を見て、動搖でもしてるので？ ウブだなあ。  
「あれ？ 虎杖君も泳げないの？ 泳ぎ方教えてあげよっか？」  
「ごめん。 鋼凧に泳ぎで負ける自信が無いから、別にいいよ」  
鋼凧の親切心を挑発で返す虎杖。 本当に珍しい。 やはり動搖しているのか。

「……虎杖君、ごめん良く聞こえなかつた」

当然、癪に障つた鋼凧は虎杖に謝罪の場を設けるが。

「余計なお節介だよ、つて言つたんだ。今度はよく聞こえた？」

何故か今日は毒舌の虎杖は、さらなる挑発をした。

「……実はもしかして独りで泳ぐのとかつまらないから、わざと鋼凧を挑発して対決しようとしてるのか？」

そこまで、泳ぐのはつまらん事なのか？ 泳げないから分からぬけど。

「うん、良く聞こえた。ちょっとあつちに25メートルの競泳用のプールがあるんだけど、行かない？」

鋼凧、めつた笑顔。

目が笑つてないと、そういう失態をせずに、全力の笑顔で虎杖を地獄へ誘う。

「ああ、いいよ」

「虎杖」

虎杖が鋼凧の誘いを受け、移動しようとする前、俺は反射的に声を掛けてしまった。

「……死ぬなよ」

「ええ」

その俺の一言に、虎杖は短くハツキリと答え……戦場へと行つてしまつた。

「…………一輝、誰に向かつて敬礼してるので？」

戦場へ行つてしまつた虎杖にしばらく敬礼を送つていると、遅れて千秋がやってきた。

チツ、パークーみたいなのを羽織つてやがる。

「つていうか……あれ？ 梓美ちゃんたちは？」

「戦場へ……行つたよ……」

「?????」

俺の回答に合点がいかないのか、千秋は首を傾げている。

まあ、千秋には分からぬだろうな。虎杖の勇気は。

「まあ、いいや。梓美ちゃんたちが居ないなら先に話しておきたい事があるし」

「何だ？」

「《完全干渉》の件なんだけど」

「居場所が分かつたのか？」

「うん。それと《干渉不可》と接触してた」

「…………いつ？」

「ちいが3等当てた日」

あの日か……鋼凪の退院祝いの知らせを聞いた後、携帯の電源を切つてたからな。

電話だつたら、通じない。

「メールすれば良かつただろ」

「だつて緊急事態だと思つて……」「……」

「そつか…………なら、何でその日のうちに俺に伝えなかつた？」

「…………買い物してたら忘れてました……」

「この事を思い出したのは？」

「ついわつとき……着替えてる時に」

「はいはい、よく伝えられたねー。偉いねー」

「ごめんなさい！」

別に謝らなくていい。伝えてくれただけまだマシだ。

『完全干渉』と『干渉不可』が接觸か…………また、仕掛ける前に

仕掛けられそうな展開だな。

「一輝……お詫びに泳ぎ方、教えてあげようか？」

「千秋。お前正直、詫びる気ないだろ？」

**快気祝い（後書き）**

注意：水着は取れません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2876y/>

---

クローバー：コード

2011年11月23日19時45分発行